

兵庫県文化財調査報告 第51冊

りゅう こ むか い やま
龍子向イ山

—山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅵ—

1987. 3

兵庫県教育委員会

例 言

1. 本書は、山陽自動車道建設に伴う兵庫県龍野市揖西町龍子字向イ山に所在する龍子向イ山遺跡・龍子向イ山古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査ならびに整理作業は、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて兵庫県教育委員会が調査主体となり実施した。発掘調査は、昭和57・59年度の2年次にわたって実施した。調査は、昭和57年4月20日～昭和58年2月3日の164日間と、昭和59年8月29日～9月27日の18日間の計182日間を費やした。
3. 発掘調査は、兵庫県教育委員会が調査主体となり、社会教育・文化財課技術職員岡田章一・渡辺 昇・村上賢治が担当した。
4. 本書で示す標高値は、日本道路公団設定のB.M.を使用した値で、方位は磁北である。
5. 遺構写真は、調査員が撮影した。空中写真は、日本産業航空株式会社に委託して撮影した。ただ、図版8については国土地理院撮影のものを使用した。
6. 整理作業は、昭和58・61年度に実施した。昭和58年度は山陽自動車道発掘調査事務所で行い、昭和61年度は兵庫県埋蔵文化財調査事務所で行った。
7. 遺物写真は、森 昭氏に依頼し撮影して載いた。
8. 遺物の実測は、原則的に土器を4分の1、鉄器を2分の1、石器を3分の2、玉類・旧石器を1分の1で記載している。土器・鉄器の大形品についてはそれ以上の縮尺となっている。また、実測図の断面で種別を表している。白抜きは弥生土器・土師器、黒塗りは須恵器である。
9. 執筆は、本文目次の通りである。
10. 本報告にかかる遺物・スライドなどの資料は、兵庫県埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）ならびに兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630-1）に保管している。



本文目次

例言

第1章	はじめに	渡辺	
第1節	調査に至る経緯		1
第2節	昭和57年度発掘調査の経過		3
第3節	昭和59年度発掘調査の経過		9
第4節	整理作業の経過		11
第2章	位置と環境	渡辺	15
第3章	龍子向イ山遺跡		23
第1節	弥生時代集落跡		
1	立地	渡辺	24
2	住居跡	渡辺	28
3	構状遺構	渡辺	31
4	出土遺物		
(1)	土器	渡辺	34
(2)	石器	大下・滝川	54
第2節	古墳時代の遺構	村上	
1	遺構		61
2	遺物出土状態		62
3	出土遺物		62
4	小結		63
第3節	旧石器時代の遺物	大下	66
第4章	龍子向イ山古墳群		
第1節	龍子向イ山1号墳	村上	
1	位置		69
2	外形		71
3	墳丘築成		72
4	横穴式石室		72
5	遺物出土状態		78
6	石室の再利用		80
7	出土遺物		

(1) 土器	82
(2) 鉄器	90
(3) 耳環	95
(4) 再利用時の遺物	96
8 小結	98
第2節 龍子向イ山2号墳	渡辺
1 位置	113
2 外形	113
3 墳丘築成	114
4 横穴式石室	114
5 遺物出土状態	116
6 出土遺物	
(1) 土器	小川 121
(2) 鉄器	123
(3) 耳環	123
7 小結	128
第3節 龍子向イ山3号墳	渡辺
1 位置	129
2 外形	130
3 墳丘築成	131
4 横穴式石室	132
5 遺物出土状態	135
6 出土遺物	
(1) 土器	小川 137
(2) 鉄器	岡村 140
7 小結	145
第4節 龍子向イ山4号墳	渡辺
1 位置	146
2 外形	147
3 墳丘築成	147
4 横穴式石室	148
5 遺物出土状態	153
6 出土遺物	

(1) 土器	小川	153
7 小結		154
第5節 龍子向イ山5号墳	渡辺	
1 位置		156
2 外形		159
3 横穴式石室		159
第5章 特殊遺物の検討		
第1節 龍子向イ山1号、2号墳出土の火葬人骨	池田	161
第2節 龍子向イ山古墳群および 中井古墳群出土須恵器の胎土分析	三辻	163
第6章 龍子I散布地確認調査結果	渡辺	167
第7章 おわりに	渡辺	171
第1節 龍子向イ山古墳群周辺の遺跡の消長について		172
第2節 龍子向イ山古墳群の特質について		174
第3節 龍子向イ山古墳群の出土遺物について		178

図版目次

図版1	(上) 龍子向イ山空中写真(北東から)	
	(下) 龍子向イ山空中写真(北から)	
図版2	(上) 龍子向イ山遠景(北から)	
	(下) 龍子向イ山空中写真(北西から)	
図版3	(上) 龍子向イ山1号墳遺物出土状態	
	(下) 龍子向イ山1号墳墳丘断面	
図版4	(上) 龍子向イ山1号墳火葬骨検出状況	
	(下) 龍子向イ山1号墳火葬骨検出状況	
図版5	(上) 龍子向イ山2号墳横穴式石室全景(火葬骨検出状況)	
	(下) 龍子向イ山2号墳墳丘断面	
図版6	(上) 龍子向イ山3号墳横穴式石室全景	
	(下) 龍子向イ山3号墳墳丘断面	
図版7	(上) 龍子向イ山遺跡溝状遺構出土土玉	
	(下) 龍子向イ山1号墳出土耳環	

- 図版 8 龍子向イ山周辺空中写真
- 図版 9 (上) 龍子向イ山空中写真 (南から)
(下) 龍子向イ山空中写真 (南西から)
- 図版10 (上) 龍子向イ山空中写真 (南西から)
(下) 龍子向イ山空中写真 (北東から)
- 図版11 (上) 龍子向イ山空中写真 (東から)
(下) 龍子向イ山空中写真 (北から)
- 図版12 (上) 龍子向イ山遺跡全景 (南西から)
(下) 龍子向イ山遺跡全景 (北から)
- 図版13 (上) 龍子向イ山遺跡1・2号住居跡
(下) 龍子向イ山遺跡1・2号住居跡
- 図版14 (上) 龍子向イ山遺跡1・2号住居跡土層断面
(下) 龍子向イ山遺跡炉跡
- 図版15 (上) 龍子向イ山遺跡槽状遺構 2
(下) 龍子向イ山遺跡槽状遺構 2
- 図版16 (上) 龍子向イ山遺跡溝状遺構鉄斧・鉄剣出土状況
(下) 龍子向イ山遺跡溝状遺構鉄斧・鉄剣出土状況
- 図版17 (上) 龍子向イ山遺跡溝状遺構全景
(下) 龍子向イ山遺跡溝状遺構ガラス小玉出土土壌
- 図版18 (上) 龍子向イ山古墳群南地区全景
(下) 龍子向イ山古墳群南地区全景
- 図版19 (上) 龍子向イ山1号墳調査前 (南から)
(下) 龍子向イ山1号墳調査前 (西から)
- 図版20 (上) 龍子向イ山1号墳列石 (北から)
(下) 龍子向イ山1号墳固溝状落ち込み (西から)
- 図版21 (上) 龍子向イ山1号墳石室前遺物出土状況
(下) 龍子向イ山1号墳再利用時遺物出土状況 (西から)
- 図版22 (上) 龍子向イ山1号墳墳丘全景 (西から右奥は2号墳)
(下) 龍子向イ山1号墳追葬面遺物出土状況 (西から)
- 図版23 (上) 龍子向イ山1号墳追葬面遺物出土状況
(下) 龍子向イ山1号墳追葬面遺物出土状況
- 図版24 (上) 龍子向イ山1号墳敷石面遺物出土状況
(下) 龍子向イ山1号墳敷石面完掘状況 (左奥は人骨)

- 図版25 (上) 龍子向イ山1号墳羨道部遺物出土状況
(下) 龍子向イ山1号墳敷石面と閉塞石(東から)
- 図版26 (上) 龍子向イ山1号墳敷石面遺物出土状況
(下) 龍子向イ山1号墳敷石面遺物出土状況
- 図版27 (上) 龍子向イ山2号墳調査前全景(西から)
(下) 龍子向イ山2号墳全景
- 図版28 (上) 龍子向イ山2号墳遺物出土状況
(下) 龍子向イ山2号墳遺物出土状況
- 図版29 (上) 龍子向イ山2号墳石室全景
(下) 龍子向イ山2号墳石室全景
- 図版30 (上) 龍子向イ山2号墳土層堆積状況
(下) 龍子向イ山2号墳墳丘土層断面
- 図版31 (上) 龍子向イ山2号墳石室全景
(下) 龍子向イ山2号墳北側壁
- 図版32 (上) 龍子向イ山2号墳石室基底石全景
(下) 龍子向イ山2号墳石室基底石全景
- 図版33 (上) 龍子向イ山3号墳調査前全景
(下) 龍子向イ山3号墳石材落石状況
- 図版34 (上) 龍子向イ山3号墳遺物出土状態
(下) 龍子向イ山3号墳遺物出土状態
- 図版35 (上) 龍子向イ山3号墳石室全景
(下) 龍子向イ山3号墳石室全景
- 図版36 (上) 龍子向イ山3号墳石室全景
(下) 龍子向イ山3号墳石室全景
- 図版37 (上) 龍子向イ山3号墳墳丘土層断面
(下) 龍子向イ山3号墳墳丘土層断面
- 図版38 (上) 龍子向イ山4号墳古墳全景
(下) 龍子向イ山4号墳古墳全景
- 図版39 (上) 龍子向イ山4号墳石室全景
(下) 龍子向イ山4号墳奥壁
- 図版40 (上) 龍子向イ山4号墳閉塞状況
(下) 龍子向イ山4号墳石室基底石全景
- 図版41 (上) 龍子向イ山4号墳墳丘土層断面

- (下) 龍子向イ山4号墳墳丘土層断面
- 図版42 龍子向イ山1-4号墳空中写真
- 図版43 龍子向イ山遺跡出土土器(弥生土器)
- 図版44 (上) 龍子向イ山遺跡1・2号住居跡出土土器
(下) 龍子向イ山遺跡出土土器(壺文様)
- 図版45 (上) 龍子向イ山遺跡出土土器(壺)
(下) 龍子向イ山遺跡出土土器(壺)
- 図版46 (上) 龍子向イ山遺跡出土土器(壺)
(下) 龍子向イ山遺跡出土土器(底部・把手)
- 図版47 (上) 龍子向イ山遺跡出土土器(甕)
(下) 龍子向イ山遺跡出土土器(鉢・高杯)
- 図版48 (上) 龍子向イ山遺跡出土土器(脚部・器台)
(中) 龍子向イ山遺跡出土土器
(下) 龍子向イ山遺跡溝状遺構出土玉
- 図版49 (上) 龍子向イ山遺跡出土石器
(下) 龍子向イ山遺跡溝状遺構出土鉄斧(X線写真)
- 図版50 (上) 龍子向イ山遺跡溝状遺構出土鉄斧
(下) 龍子向イ山遺跡溝状遺構出土刀子・劍
- 図版51 龍子向イ山1号墳出土土器
- 図版52 龍子向イ山1号墳出土土器
- 図版53 龍子向イ山1号墳出土土器
- 図版54 龍子向イ山1号墳出土土器
- 図版55 龍子向イ山1号墳出土土器
- 図版56 龍子向イ山1号墳出土土器
- 図版57 龍子向イ山1号墳出土土器
- 図版58 龍子向イ山1号墳出土土器
- 図版59 (上) 龍子向イ山1号墳出土鉄器(鉄鏃)
(下) 龍子向イ山1号墳出土鉄器(鉄鏃)
- 図版60 龍子向イ山1号墳出土鉄器(鉄鏃)
- 図版61 龍子向イ山1号墳出土鉄器(兵車鎖)
- 図版62 (上) 龍子向イ山1号墳出土鉄器(轡)
(下) 龍子向イ山1号墳出土鉄器(鉸具)
- 図版63 (上) 龍子向イ山1号墳出土鉄器(鉸留金具)

(下) 龍子向イ山1号墳出土鉄器(鉄鏝・刀子)

- 図版64 龍子向イ山1号墳再利用時出土土器
図版65 龍子向イ山2号墳出土土器
図版66 龍子向イ山2・4号墳出土土器・鉄器・耳環
図版67 龍子向イ山3号墳出土土器
図版68 龍子向イ山3号墳出土土器
図版69 龍子向イ山3号墳出土土器・鉄器
図版70 (上) 龍子向イ山3号墳出土鉄器
(下) 龍子向イ山3号墳出土鉄器

表 目 次

第1表	龍子向イ山遺跡・古墳群周辺の遺跡一覧表	19
第2表	槽状遺構1ピット計測表	32
第3表	槽状遺構2ピット計測表	33
第4表	1・2号住居跡出土土器観察表	35
第5表	住居跡以外出土土器観察表	48~54
第6表	石器観察表	59
第7表	出土玉類計測表	65
第8表	龍子向イ山1号墳出土土器観察表	100~111
第9表	龍子向イ山1号墳出土鉄器・耳環一覧表	112
第10表	龍子向イ山2号墳出土鉄器計測表	125
第11表	龍子向イ山2号墳出土耳環計測表	125
第12表	龍子向イ山2号墳出土土器観察表	126・127
第13表	龍子向イ山3号墳出土土器観察表	142~144
第14表	龍子向イ山3号墳出土鉄器計測表	145
第15表	龍子向イ山4号墳出土土器観察表	155
第16表	龍子向イ山古墳群および中井古墳群出土須恵器の分析値	166
第17表	龍子向イ山古墳群周辺の石室計測表	177
第18表	龍子向イ山古墳群出土遺物一覧表	179

挿 図 目 次

第1図	調査地遠景	1
第2図	山陽自動車道路線内の遺跡	2
第3図	調査風景	3
第4図	ラジコンヘリによる写真撮影	4
第5図	調査に参加した人達	4
第6図	調査風景	5
第7図	慰霊祭風景	5
第8図	現地説明会風景	6
第9図	調査風景	6
第10図	調査に参加した人達	7
第11図	調査風景	7
第12図	調査風景	8
第13図	現地説明会遺物展示風景	8
第14図	調査風景	9
第15図	埋戻し風景	10
第16図	鉄斧の複製品	11
第17図	整理作業風景	11
第18図	整理作業風景	13
第19図	西宮山古墳跡と揖西平野	15
第20図	龍子向イ山遺跡・古墳群周辺の地形	16
第21図	半田山1号墓第1主体	17
第22図	龍子向イ山遺跡・古墳群周辺の遺跡	18
第23図	鳥坂2号墳主体部	20
第24図	鳥坂3号墳出土鏡	20
第25図	中井2号墳	21
第26図	宝林寺北遺跡中世墓	22
第27図	龍子向イ山遺跡の位置と周辺の遺跡	23
第28図	龍子向イ山遺跡の位置	24
第29図	龍子向イ山遺跡地形測量図	25・26
第30図	龍子向イ山遺跡土層断面図	27
第31図	6トレンチ土層断面図	28

第32图	龍子向イ山遺跡1・2号住居跡実測図	29
第33图	焼土壙	30
第34图	3号住居跡	30
第35图	3号住居跡実測図	31
第36图	槽状遺構1実測図	32
第37图	槽状遺構2実測図	33
第38图	1・2号住居跡出土土器実測図	34
第39图	弥生土器実測図(1)	37
第40图	弥生土器実測図(2)	38
第41图	器形分類図(壺・甕)	40
第42图	弥生土器実測図(3)	41
第43图	弥生土器実測図(4)	42
第44图	弥生土器実測図(5)	43
第45图	弥生土器実測図(6)	44
第46图	弥生土器実測図(7)	45
第47图	弥生土器文様拓影(1)	46
第48图	弥生土器文様拓影(2)	47
第49图	石器実測図(1)	55
第50图	石器実測図(2)	56
第51图	石器実測図(3)	57
第52图	石器実測図(4)	58
第53图	溝状遺構実測図	61
第54图	溝状遺構遺物出土状態図	62
第55图	溝状遺構出土鉄斧実測図	62
第56图	溝状遺構出土鉄剣実測図	63
第57图	溝状遺構出土刀子実測図	63
第58图	溝状遺構・方形土壙出土玉類実測図	64
第59图	旧石器実測図	66
第60图	旧石器遺物写真(約2倍)	67
第61图	龍子向イ山古墳群分布図	69
第62图	龍子向イ山古墳群1・2・4号墳地形測量図	70
第63图	龍子向イ山1号墳墳丘測量図	71
第64图	龍子向イ山1号墳墳丘断面図	73・74

第65図	龍子向イ山1号墳石室実測図	75・76
第66図	龍子向イ山1号墳石室上面図	77
第67図	龍子向イ山1号墳第2次面人骨検出状態図	79
第68図	龍子向イ山1号墳第3次面遺物出土状態図	81
第69図	龍子向イ山1号墳出土須恵器実測図(1)	83
第70図	龍子向イ山1号墳出土須恵器実測図(2)	85
第71図	龍子向イ山1号墳出土須恵器実測図(3)	87
第72図	龍子向イ山1号墳出土須恵器実測図(4)	88
第73図	龍子向イ山1号墳出土須恵器実測図(5)	89
第74図	龍子向イ山1号墳出土須恵器実測図(6)	90
第75図	1号墳出土鉄器分布図(1)〔鉄鍬・刀子〕	91
第76図	龍子向イ山1号墳出土鉄器実測図(1)〔鉄鍬〕	92
第77図	龍子向イ山1号墳出土鉄器実測図(2)〔刀子〕	92
第78図	1号墳出土鉄器分布図(2)〔馬具・鉸具・紙留金具〕	93
第79図	龍子向イ山1号墳出土鉄器実測図(3)〔馬具〕	94
第80図	龍子向イ山1号墳出土鉄器実測図(4)〔鉸具〕	95
第81図	1号墳出土耳環分布図	96
第82図	龍子向イ山1号墳出土耳環実測図	96
第83図	1号墳出土土師器	97
第84図	龍子向イ山1号墳出土再利用時の須恵器実測図	97
第85図	龍子向イ山2号墳墳丘測量図	113
第86図	龍子向イ山2号墳墳丘土層断面図	115
第87図	南地区空中写真	116
第88図	龍子向イ山2号墳石室実測図	117・118
第89図	2号墳遺物出土状態図1(第2次床面)	119
第90図	龍子向イ山2号墳遺物出土状態図2(第1次床面)	120
第91図	龍子向イ山2号墳出土土器実測図	122
第92図	土師器実測図	123
第93図	龍子向イ山2号墳出土鉄器実測図	124
第94図	龍子向イ山2号墳出土耳環実測図	124
第95図	龍子向イ山3号墳地形測量図	129
第96図	龍子向イ山3号墳墳丘測量図	130
第97図	龍子向イ山3号墳地山面測量図	131

第98図	龍子向イ山3号墳墳丘土層断面図	131
第99図	龍子向イ山3号墳石室実測図	133・134
第100図	龍子向イ山3号墳遺物出土状態図	136
第101図	龍子向イ山3号墳出土須恵器実測図	138
第102図	土師器実測図	139
第103図	龍子向イ山3号墳後世の遺物実測図	139
第104図	龍子向イ山3号墳鉄器実測図(1)	140
第105図	龍子向イ山3号墳鉄器実測図(2)	141
第106図	須恵器内面の成形痕	146
第107図	龍子向イ山4号墳墳丘測量図	148
第108図	龍子向イ山4号墳墳丘土層断面図	149
第109図	龍子向イ山4号墳石室実測図	151・152
第110図	龍子向イ山4号墳須恵器実測図	154
第111図	龍子向イ山4号墳土師器実測図	154
第112図	龍子向イ山5号墳石室実測図	157・158
第113図	龍子向イ山5号墳全景	159
第114図	龍子向イ山5号墳横穴式石室	159
第115図	龍子向イ山古墳群出土須恵器のRb-Sr分布図	163
第116図	龍子向イ山古墳群・中井古墳群出土須恵器のK量	164
第117図	龍子向イ山古墳群・中井古墳群出土須恵器のCa量	165
第118図	中井古墳群出土須恵器のRb-Sr分布図	165
第119図	龍子向イ山古墳群出土須恵器のクラスター分析	166
第120図	龍子I散布地調査地点図	167
第121図	龍子I散布地土層断面図	168
第122図	龍子I散布地全景	168
第123図	養久山19号墳石室実測図	169・170
第124図	三ツ塚山塊の石室	175・176

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

山陽自動車道は、吹田市を起点とし神戸市北区まで中国縦貫自動車道と路面を共有し、三木市・加古川市・姫路市と徐々に南に下がりながら播磨を西進し、中国地方の南部を縦断し山口市に至る総延長430kmの高速自動車道路である。現在、兵庫県関係では龍野西～備前インターチェンジ間25.3kmが、昭和57年3月に供用を開始している。

昭和46年に基本計画が発表されてから、幅広い範囲で分布調査が実施された。龍野市域は上田哲也氏を中心に行われた。ルート決定後の詳細分布調査は昭和50年度に行われ、日本道路公団大阪建設局と兵庫県教育委員会の間で協議が重ねられてきた。兵庫県教育委員会も随時分布調査を行い、調査結果ごとに協議も行われている。また、その間に路線内の伐採も実施され、地元研究者による分布調査も行われ、龍子向イ山古墳群（当初は龍子群集墳）も確認された。

確認調査は、昭和53年度に相生市ツブレ池古墳・龍野市南山散布地・龍野市と揖保川町にまたがる片島1号墳の確認調査を皮切りに、翌年に赤穂市堂山遺跡・相生市緑ヶ丘竊跡群の全面調査が行われ、昭和61年度まで龍野市を中心として調査が実施されている。当初20数地点が挙げられていたが、確認調査で終了したものや遺跡が路線外に存在するものを除いて、姫路東インターチェンジ以西の15地点で全面調査が実施されている。

昭和57年度も、前年度までの調査に引き続いて龍野西インターチェンジ以東の調査を実施することになり、兵庫県教育委員会は2パーティ（4人）を投入した。調査は昭和57年4月20日龍子向イ山3号墳の伐採作業を皮切りに、翌2月3日龍子向イ山1号墳の石室実測を終えるまで延べ164日間費やした。龍子神社が鎮座しており、未買収地が残っていることから調査は中断せざるを得なくなった。そのため、調査を凍結するためシートで遺跡全体を覆う作業を行い昭和57年度の調査を終了した。

龍子向イ山古墳群（当初は龍子群集墳）は、昭和50年度に兵庫県教育委員会が作成した『山陽自動車道遺跡分布調査報告』にすでに「No.21龍子群集墳」として登録されている。しかし、最近刊行された『全国遺跡地図28兵庫県』（1982年5月）をはじめ兵庫県教育委員会発行の遺跡分布地図及び地名表には記載されていなかった。ただ、龍野市教育委員会から刊行された『長尾タイ山古墳群』（1982年3月）で



第1図 調査地遠景



- | | | |
|---------------|---------------------------|------------|
| 1. 大陣原窯跡群 | 5. 龍子向イ山古墳群 9. 養久山42・43号墳 | 13. 宮脇Ⅰ遺跡 |
| 2. 片島古墳群・片島遺跡 | 6. 龍子向イ山遺跡 | 10. 町屋散布地 |
| 3. 南山散布地 | 7. 龍子Ⅰ散布地 | 11. 平田山墳墓群 |
| 4. 龍子長山Ⅰ号墳 | 8. 養久乙城山遺跡 | 12. 宮脇Ⅱ遺跡 |
| | | 14. 中井古墳群 |
| | | 15. 中井鴨池空跡 |
| | | 16. 西脇古墳群 |

第2図 山陽自動車道路線内の遺跡

は、龍子古墳群として龍子向イ山古墳群と龍子長山古墳群が包括して扱われている。同じく「龍野市史第一巻」の挿図の養久山墳墓群分布図中でもドットが落とされている。本文で明確な記述はないものの三ツ塚山塊の古墳として龍子向イ山古墳群と龍子長山古墳群は同質の扱いを受けているものと思われる。「龍野市史第四巻」でも同様である。大局的には同一であろうが、尾根が異なり住所も変わるため、名称を別個に与えた。三ツ塚山塊の後期古墳として捉えるのが、歴史的に正しいことは認めている。しかし、当初龍子長山古墳群が南山古墳群と呼称されており、大字が跨がることや尾根稜線上と山腹と言う立地条件の違いからも別名称とした。大字龍子のなかには立地から幾つかの古墳群に分かれるため、小字名に大字名を冠し龍子向イ山古墳群と称することとした。

昭和55年度龍野西インターチェンジ内にかかる片島古墳群の調査が行われ、下層から弥生中期の住居跡が検出された。摂西地域でも丘陵上の弥生時代の遺跡が確認されるに至って、調査方法も少なからず変化した。3号墳の伐採が進むにつれ、斜面は緩やかで日照時間の長い生活に適した立地であることが判り確認調査を実施した。その結果、予想通り弥生時代の集落跡が確認されたため、全面調査を行うこととなり、約650㎡を対象とした。

第2節 昭和57年度発掘調査の経過

調査は、伐採作業から手掛け、地形測量を行ったのち、3号墳から調査を始めた。分布調査では3基の古墳と2ヶ所の古墳状隆起が確認されていた。新たに古墳状隆起が数箇所認められたので確認調査を実施した。その結果、1・2号墳の上方に古墳が確認され、4号墳とした。古墳4基を対象とした調査となった。1・2・4号墳と3号墳の間には谷が存在し、立地的に小区分出来るため、北・南両地区と呼んで調査を進めた。その後の分布調査では南地区には古墳が存在せず、1・2・4号墳の3基で構成されることが判った。北地区は、調査を行ったのは3号墳1基だけであるが、用地外の尾根上に2基の円墳が見られ、さらに龍子神社参道に古墳が存在したのではないかと伝えられている。3基以上の古墳で構成されることになるが、3号墳だけが山腹に立地し、他は稜線上に立地していることになる。尾根上にある古墳の1基は1～4号墳と同じく横穴式石室を埋葬主体としている（5号墳）が、他の1基は墳丘が低く径も小さく横穴式石室を埋葬主体とするか疑問である。5号墳については、調査の合間を見て石室の実測作業のみ行った。



第3図 調査風景

弥生時代の集落跡の調査は、両地区を対象としたが北地区のみしか遺跡は認められなかった。遺跡は、弥生中期の集落跡の他に古墳時代中期の溝状遺構も確認されたが、いずれも調査段階で龍子神社の鎮座する尾根上に広がっていたため、社の遷座を待って再調査することとなった。遺跡名は古墳群と同じ名称で、龍子向イ山遺跡とした。昭和57年度は弥生中期の集落跡と古墳時代中期の溝状遺構ならびに古墳時代後期の古墳4基の全面調査と、古墳状隆起と集落跡の確認調査を延べ16日間、途中に龍子長山1号墳・養久山42号墳・龍子1散布地（北山散布地）・宝林寺北遺跡の調査を挟んで、約4850㎡の調査を実施した。社の遷座・未買収地が残っていることから、遺跡・古墳群ともに継続調査が必要なまま中断した。

調査の組織

調査事務 社会教育・文化財課

課長	藤本 繁
文化財担当参事	吉村 芳郎
副課長	遠畑 實
課長補佐	池田 義雄
〃	堀 洋



第4図 ラジコンヘリによる写真撮影

埋蔵文化財係長	大村敬通
主 任	西口和彦
	小川良太
技 術 職 員	水口富夫
事 務 職 員	杉本恵子

調査担当 社会教育・文化財課

技 術 職 員	渡辺昇
技 術 職 員	村上賢治

調査補助員

津田将秀 (明治大学文学部)

小林正人 (鳥根大学法文学部)

調査参加者

吉田一夫・吉田 勝・西田数美・吉本三四二・吉田政信
 中川軍治・前田真吾・小林静雄・金治暉夫・西田あやの
 吉田フク・中川喜美枝・吉田可づ子・横田美勇子・丸山
 みつぎ・出羽 操・苗村葉子・西田ゆき子・吉田とも子
 溝口利子・富士田喜久子・矢野文朗・高山卓久・長谷川
 寛・大角直也・前田英明・井上和代・利根由扶子・前田
 玲子・赤松千恵子・出田敬子

調査日誌抄

昭和57年4月12日(月)～19日(月)

調査打合せ、準備

4月20日(火)～23日(金)

3号墳周辺から伐採開始。丘陵斜面緩やかで弥生時代の集落の可能性と古墳状隆起が見られるので全域(未買収地を除く)伐採することとする。3号墳杭打ち、地形測量開始。器材置き場やテント設置、環境整備を行う。

4月26日(月)～28日(水)

3号墳及び周辺地形測量継続。龍子神社横の



第5図 調査に参加した人達

尾根上に2m幅のトレンチ設定。弥生時代中期後半の包含層確認、遺構も検出される。古墳状隆起2ヶ所は古墳ではなかった。弥生時代集落跡の調査のための5m方眼の杭打ち行う。

5月6日(木)・7日(金)

トレンチ増やして集落跡の範囲確認。斜面全域の地形測量行う。3号墳畦畔設定して掘り始める。



第6図 調査風景

5月10日(月)～14日(金)

3号墳掘り下げ継続。石室平面プラン確認する。石材多数石室内に落ち込んでいる。石室主軸方向に合わせて、新たに畦畔設定する。石材落石状況撮影・畦畔実測後、落石除去する。南北方向をアルファベットで東西方向を数字で表わし、南西隅の番号をグリッド番号とする。調査区北西端のJ01で住居跡検出。円形住居跡で炉跡、壁溝確認。

5月17日(月)～5月21日(金)

J01住居跡拡張しており、垂木穴確認する。写真撮影後、実測。3号墳床面検出作業。奥壁隅で蓋を持つ短頸壺7組出土。玄室中央から鉄鏃・提瓶・石棺に使われる石材出土。写真撮影・出土状態図作成・遺物取り上げ。

5月24日(月)～28日(金)

3号墳遺物除去後の石室全景写真撮影。墓壇掘り下げ写真撮影。H10～G12掘り下げ。ピット列確認し、遺構掘り下げ後写真撮影。H08(溝状遺構)で鉄斧・剣・玉、焼土を伴って出土。

5月31日(月)～6月4日(金)

H08(溝状遺構)黒色土を埋土とする溝状の落ち込み検出し、掘り下げる。H04～H06掘り下げ継続。弥生包含層薄くなっている。石組確認する。龍子神社の旧参道か。

6月7日(月)～11日(金)



第7図 慰霊祭風景

H08(溝状遺構)全景写真撮影。溝の底面に土壌築かれており、溝の横にも土壌存在する。

弥生時代の溝・ピット確認。

農繁期のため、作業進まず。

6月14日(月)～18日(金)

H08(溝状遺構)溝内土壌写真撮影・実測。

J01住居跡東側未買収地の調査の了解を得るため、伐採後調査開始。土層断面作成後掘り下げ。

壁溝・周壁東へはほとんど残っていない。龍子



第8図 現地説明会風景

南地区伐採およびかたづけ継続。排土置ききの土留柵設置。

7月12日(月)～15日(木)

降雨の日が多く、作業進まず。伐採木かたづけ継続。

7月17日(土)

現地説明会を午後2時から開催する。午前中説明会準備。約250名参加。

7月19日(月)～23日(金)

開口している1号墳の石室主軸を主軸として、南地区の杭打ちを行う。(5m方眼)北地区同様北西の杭番号をグリッド名とする。緩斜面に弥生時代集落跡の確認を主目的とするトレンチ設定するが、遺構、遺物認められず、集落跡は存在しないようである。

7月26日(月)～30日(金)

杭打ち終了後、地形測量を始める。1・2号墳畦畔設定して掘り下げ開始。

8月2日(月)～6日(金)

1号墳南東墳裾部分から須恵器出土。2号墳畦畔撮影・実測し、掘り下げる。床面検出作業。

4号墳地形測量。北地区ラジコンヘリによる空中写真撮影。

8月17日(火)～20日(金)

4号墳上方地形測量。4号墳畦畔設定して掘り始める。2号墳床面から人骨出土。棺台と考えられる石置かれている。標高の低い北側へ側壁傾いている。1号墳石室内畦畔設けて掘り下げる。後世の遺物出土。

8月23日(火)～27日(金)

慰霊祭を行う。1号墳石室掘り下げ継続する。平安時代末の須恵器・土師器出土。2つの面で写真撮影し、出土状態・断面実測する。2号墳

I 散布地の確認調査を16日に行う。遺構存在しない。

6月21日(月)～25日(金)

南地区の伐採開始。H08～G12割り付け後実測を行う。J01住居跡実測図追加。

6月28日(月)～7月2日(金)

南地区伐採および伐採木かたづけ継続。3号墳割り付けし、実測開始。

7月5日(月)～9日(金)



第9図 調査風景



第10図 調査に参加した人達

チ設定するが遺構なし。

9月6日(月)～10日(金)

1号墳、石室内横断面土層図作成。縦断畦畔除去。横断残した状態で石室全景写真撮影。須恵器・耳環など副葬品多数出土する。横断除去し、床面清掃。2・4号墳全景写真撮影。南地区の全景写真も各方面から撮影。今週から龍子長山1号墳の調査開始する。

9月13日(月)～17日(金)

1号墳、遺物出土状態の全景と部分写真撮影。石室床面も含めて出土状態実測。4号墳割り付け後実測。主軸方向に断ち割りトレンチ設定し、墓竈確認。現地説明会準備。

9月18日(土)

北地区も含めて全体にシートかたづけ現地説明会準備。午後2時から鳥坂古墳群と合わせて説明会実施。約400人参加。

9月20日(月)～22(水)

1号墳石室内掘り下げ。奥壁前方で骨まとまって出土。原位置で火葬されたものと思われる。3号墳墳丘除去作業を行い、墓竈検出する。

9月27日(月)～10月1日(金)

台風による被害甚大。2・4号墳側壁の一部崩壊する。1号墳火葬骨出土状況撮影。2号墳割り付け後実測。

10月4日(月)～8日(金)

1号墳遺物出土状況実測・撮影。閉塞石写真撮影。2号墳、断ち割りトレンチ設定し墓竈検出、墳丘築成状況観察、実測継続。

10月12日(火)～15日(金)

1号墳、遺物出土状況部分写真撮影。耳環など遺物取り上

石室内畦畔断面観察実測後除去。床面写真撮影。

4号墳床面検出作業。土師器片出土。

8月30日(月)～9月3日(金)

台風13号による被害のかたづけ。1号墳畦畔を残したまま、床面まで掘り下げる。須恵器・鉄器とともに骨片出土。縦断面実測。2号墳出土状態作成しながら遺物取り上げ。4号墳閉塞施設があり、開口部外側で須恵器大甕出土。畦畔撮影後、断面図作成。1・4号南側にトレン



第11図 調査風景



第12図 調査風景

げ。南地区全景ラジコンヘリによる空中写真撮影。1号墳を除き、当面の調査終了。

10月18日(月)～22日(金)

1号墳石室清掃作業。

10月25日(月)～29日(金)

1号墳石室清掃・掘り下げ継続。遺跡全景を日本産業航空に委託し、セスナ機による空中写真撮影。

11月1日(月)～12日(金)

1号墳表土部掘り下げ後、実測。遺物取り上げ。人骨清掃・写真撮影。

11月15日(月)～19日(金)

1号墳、火葬状態割り付け後、実測開始。今週から養久山42・43号墳の調査と併行作業とする。

11月24日(水)～27日(土)

1号墳、玄室北西隅の人骨を除いて取り除き、敷石を検出していく。

11月29日(月)～12月3日(金)

1号墳玄室割り付け、実測開始。

12月6日(月)～10日(金)

1号墳石室実測継続。出土遺物もエレベーション記入後、順次取り上げ。

12月13日(月)～17日(金)

1号墳石室実測継続。墳丘北側で列石検出する。今週から宝林寺北遺跡確認調査と併行する。

12月20日(月)～24日(金)

1号墳・実測継続。墳裾部分の掘り下げ。

12月25日(土)

1号墳の石室内火葬を中心に現地説明会開催。龍子長山1号墳も合わせて見て頂く。約250名参加。

昭和58年1月10日(月)～14日(金)

1号墳石室実測継続。墳丘断面実測。

1月17日(月)～21日(金)

1号墳墳丘測量図作成。外護列石清掃し1号墳全景写真撮影。墳丘断ち割りトレンチ3本設定し、掘り下げる。



第13図 現地説明会遺物展示風景

1月24日（月）～28日（金）

1号墳、火葬骨取り上げ。京都大学理学部池田次郎教授に鑑定して載くため、京都大学へ搬入。断ち割りトレンチ写真撮影・土層断面図作成。墓墳も確認する。

1月31日（月）～2月3日（木）

断面図など補足し、今年度の現地での調査終了する。プレハブ撤去するため、発掘機器・器材・出土遺物かたづけ、魚住分館へ搬入し、4月20日からの約10ヶ月間の調査終了する。

第3節 昭和59年度発掘調査の経過

「龍子向イ山」の北地区では龍子神社が、南地区では未買収地域が残っていたため、ともに調査を完了出来ず、調査を中断した状況であった。北地区においては、弥生集落跡が龍子神社の存在する尾根上に続いている可能性があり、また参道周辺に未確認の古墳も残っている可能性が考えられたため調査を行う必要があった。南地区においては1・2・4号墳と同質な古墳が未買収地に存在する可能性があったため、古墳群全体の写真撮影などの全体的な調査を必要としたことから、墳丘断ち割りなど最小限の調査しか実施していなかった。

昭和58年2月調査中断後、翌年度は現地においては変化がなかったが、59年2月9日、龍子神社の移転方法について協議し、現地で調査方法の検討を行った。建物下の遺構の残存度が問題となったため、翌10日現地において簡単な確認調査を行ったところ、整地部分には遺構は全く残っていなかったため、神社解体、参道石段除去については注意して重機による工事を進めて頂くこととした。昭和59年度に入り新しい龍子神社も長山の東麓に完成し、具体的な話の段階になってきた。年度当初計画の段階では、龍子向イ山の調査予定は組まれておらず、1パーティ（2人）が山陽自動車道の調査に8月から入る計画となっていた。太子龍野バイパスに伴う宝林寺北遺跡の調査が予定より早く終了したため、7月9日から山陽自動車道関係の調査として、揖保川町半田山墳墓群の調査に入った。それでも調査計画に入れることが不可能なので、日本道路公団と兵庫県教育委員会と協議の結果、工事完成予定の上からも龍子向イ山の早い対応を迫られた。そのため、西脇古墳群の調査は保存を講ずるための最小限な調査とし、龍子向イ山に調査日程を裂くことで協議が整った。

半田山墳墓群の調査が一段落し、作業員の手が余りはじめた8月29日北地区の伐採作業から始め、9月27日南地区1号墳の埋め戻し作業を終えるまでの18日間を費して、2年度にわたる「龍子向イ山」の現地調査を終了した。

調査に入るまで、龍子神社解体時の立会いの



第14図 調査風景

結果、尾根上（龍子神社鎮座地）に集落跡は残っており、神社境界と57年度調査地区の間である約125㎡の全面調査と尾根上の掘削を受けていない部分5ヶ所（約25㎡）の確認調査を北地区では実施することとなった。南地区では南地区未買収地の立入りが許された段階でその分布調査の結果、古墳は認められなかった。そのため、南地区（支群）は3基の円墳で構成されることが判明した。全体写真撮影後、2・4



第15図 埋戻し風景

号墳については墳丘除去作業を行い、基底石の状況を明らかにした。しかし、1号墳については最小限の保存であるが盛土下の保存が図られたので、石室の解体は行わず、石室が土圧に耐えられるよう日本道路公団関係者の教示を得て、真砂を入れたのち砕石・真砂で埋め戻し、旧状に復原した。

調査の組織

調査事務 社会教育・文化財課

課長	西 沢 良 之
文化財担当参事	大 西 章 夫
副 課 長	森 崎 理 一
課 長 補 佐	和 田 富 夫
管 理 係 長	小 西 清
埋 藏 文 化 財	
調 査 係 長	榎 本 誠 一
主 査	坂 本 豊 明
技 術 職 員	大 平 茂
事 務 職 員	杉 本 恵 子

調査担当 社会教育・文化財課

技 術 職 員	岡 田 章 一
〃	渡 辺 界

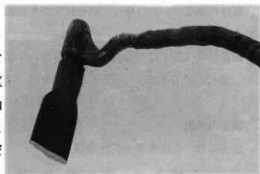
発掘調査参加者

吉本三四二・山本正一・西脇民一・井上一三・西脇 淳・門口房夫・門口秀巳・出羽一雄・
藤田鈴枝・土井栄子・栗川律子・房安まみ・赤松千恵子・出田敬子・金治美香

調査日誌抄

昭和59年8月29日(水)～31日(金)

神社遷座後の立会いで神社内に遺跡残存していないことを確認しているため、57年度調査区と神社の間を全面調査対象地域とする。半田山墳墓群の調査と併行して行う。溝状遺構はほとんど続いておらず、弥生時代の遺構も包含層だけで遺構は確認されなかった。



第16図 鉄斧の複製品

9月3日(月)～7日(金)

北地区全面調査部分終了。南地区南半確認するが、古墳認められない。南地区は1・2・4号墳の3基で構成されることが判った。4号墳墳丘除去作業開始。

9月11日(火)～14日(金)

4号墳墳丘除去作業、北側の標高の低い方は墓塚を持たず、地山上に石材置いている。墳丘縦断撮影・実測。1号墳石室縦断面図作成。

9月17日(月)～21日(金)

1号墳墳丘測量。1・2号墳墳丘除去作業。

9月25日(火)～27日(木)

1・2号墳墳丘断面撮影・実測。2号墳は基底石だけの状態で写真撮影。1号墳の盛土下ではあるが保存されるため、一部断ち割り作業を行い実測・撮影したのち、真砂・砕石で埋め戻し作業を行う。墳丘全体覆うように埋め戻し、龍子向イ山の現地での作業終了する。

第4節 整理作業の経過

整理作業は、調査翌年の昭和58年度から開始し、昭和61年度に報告書刊行までの作業を実施し終了した。なお、昭和57年度も現地調査事務所にて雨天の日などに一部整理作業を行っているが、本格的には58・61年度に行った。

(1)昭和58年度整理作業の経過

58年度は57年度調査資料について水洗い・ネーミング・接合復原作業を実施した。58年度は前年度にも増して、近畿自動車道舞鶴線の調査を中心に調査計画が年間を通してのもので、整理作業期間が見出されなかった。そのため、現地山陽道現場事務所において整理作業を行うこととなった。



第17図 整理作業風景

整理作業を行った対象は、昭和57年調査の弥生土器19箱、須恵器30箱、石器65点、鉄器93点である。

調査がほぼ終了に近づいた11月1日から半年間、神戸市中央区県民会館2階ふるさと資料室で、養久乙城山遺跡などととも展示を行い県民の方々に見て戴いた。

調査の組織

調査事務 社会教育・文化財課

課長	西沢良之
文化財担当参事	大西章夫
副課長	森崎理一
課長補佐	池田義雄
管理係長	福永慶造
埋蔵文化財	
調査係長	榎本誠一
主査	八家均
技術職員	大平茂
事務職員	杉本恵子

調査担当 社会教育・文化財課

技術職員	渡辺昇
調査補助員	

赤松千恵子・出田敬子・横田久美・西上知予子・金治美香

(2)昭和61年度整理作業の経過

61年度は、59年度調査資料の弥生土器コンテナ（セキスイTS-28タイプ）5箱の水洗いから接合復原作業を行ったのち、57年度資料を含めて実測作業以降報告書刊行までを行い整理作業を終了した。整理調査は、兵庫県埋蔵文化財調査事務所で行った。

整理作業は、昭和61年も暮に近づいた時期から着手したため、多忙をきわめた。担当者が複数の調査報告書に関係していたため、なおさらであったが、調査補助員の多大な協力を得て何とか完遂出来た。実測は、古墳出土遺物については図化可能なものを全てを対象とした。遺跡出土の弥生土器については特殊な土器は全てを図化した。他は口縁部については口縁の4分の1以上残存しているものを底部については2分の1以上残存しているものを対象とした。実測は、調査員の他、須恵器は岡村真理子・小川真理子・伴悦子が、玉・鉄器は岡村が、弥生土器・土師器は長浜幸子が、石器は天下明・瀧川友子が担当した。トレースは大伴・小川が担当した。レイアウトは岡村・伴が八木和子・香春由美の協力を得て行い、編集は小川の協力を

得て渡辺が主担した。鉄器の保存処理は兵庫県教育委員会主任加古千恵子を担当者として増田啓・野村純子・足立育子・本藤優香を補助員として実施した。保存処理の当事務所での実施は鉄器について完全な意識の変革となった。X線撮影の導入をはじめ、実測図についても大きな変化となった。鉛を芯とする耳環の確認などはその顕著な例であろう。遺物写真は、主に10月に森 昭氏に撮影して戴いた。森氏には報告書



第18図 整理作業風景

作成段階で急遽撮影して戴き無理なお願いをするなど多大な協力を得た。また、レイアウト・校正などでも多くの教示を得たことを明記し、謝意を表します。

兵庫県民会館2階ふるさと資料室では兵庫県文化協会によって、調査を実施した直後の昭和57年11月から報告書作成作業を行う昭和61年8月まで断続的ではあるが、「龍子向イ山」の遺物を展示して戴き、県民の方々に見て戴く場を設定して戴いた。また、兵庫県埋蔵文化財調査事務所開所記念の「ひょうごの遺跡展」や西播磨文化会館での「西播磨の原始・古代・中世をたぐる展」にも出展し、有形無形の教示を得た。また、昭和61年度に竹中大工道具館の小村健夫・渡辺 晶・土屋安見各氏に出土鉄器を見て戴いたところ、複製を作成する話が起り、現在も一線で大工道具を作っている三木市宮野裕光氏によって溝状遺構出土の鉄斧の複製（第16図）を作って戴いた。作成課程での討論を含めて鉄器を考える上に非常に有効であった。感謝致します。その他多数の方々に教示を得たが、十分活用されなかったように思われるが、御寛恕戴きたい。

調査の組織

調査事務 社会教育・文化財課

課長	北村 幸久
文化財担当参事	森崎 理一
副課長	黒田 賢一郎
課長補佐	福田 至宏
管理係長	小西 清
課長補佐兼	
埋蔵文化財調査係長	大村 敬通
主査	小川 良太
主任	加古 千恵子

事務職員 松本 豊彦

〃 足立 彩久

技術職員 渡辺 昇

調査担当 社会教育・文化財課

技術職員 渡辺 昇

技術職員 村上 賢治

調査補助員

小川真理子・岡村真理子・大下 明・西上知予子・伴 悦子・長浜幸子

八木和子・香春由美・池田早恵・瀧川友子

発掘調査・整理調査に際し、多くの方々に御教示戴いた。特に、下記の方々・機関に御教示戴いた。謝意を表します。 (敬称略)

龍野市教育委員会・揖保川町教育委員会・揖保川町文化センター

市村高規・加藤史郎・是川 長・志水豊章・長石正造・彌本依予子・松本正信・吉田一夫

第2章 位置と環境

龍子向イ山古墳群・遺跡は、龍野市^{りゅうの}揖西町^{いっせい}龍子^{りゅうし}向イ山^{むかいやま}に所在し、揖西平野の南縁の丘陵上に立地する古墳群・遺跡である。『和名抄』の郷名は桑原郷に属し、『播磨国風土記』の記載でも揖保郡桑原里に相当するものと思われる。

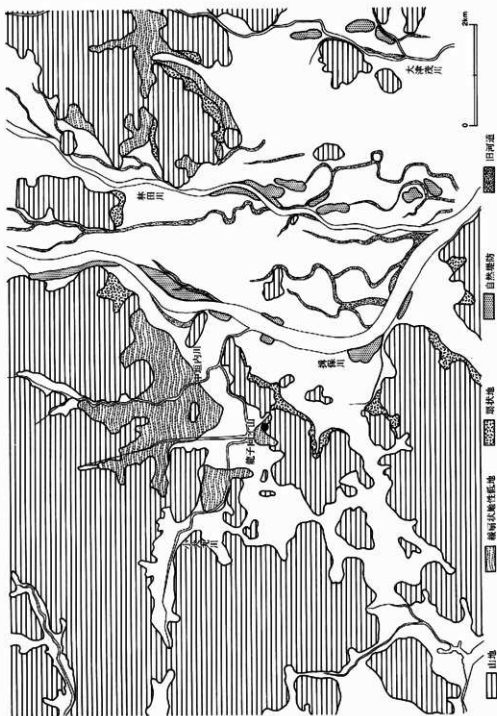
龍子向イ山古墳群・遺跡は、揖西平野の南縁を画するいわゆる三ツ塚山塊の北側の緩斜面・支尾根上に位置している。揖西平野の北側を龍野―上郡断層が走っており、地形の変換線となっている。北側の山塊は、西播磨山地とも呼ばれ、中国山地へと繋がっている。西播磨山地は典型的な隆起準平原であり、頂上付近は平坦になっている。それゆえに『播磨国風土記』に載せられた水争いの逸話が残されているものと思われる。西播磨山地の南縁にあたる台山（的場山）の南側に揖西平野は広がっており、平野北側に断層が走っている。揖西平野は、揖保川およびその支流である中垣内川によって形成された平野であり、揖保砂礫層と呼ばれる沖積層が全体を覆っている。本来なら河岸段丘が発達しそうな地形であるが、断層を境にして平地が沈下現象を起こしたため、なおさら段丘は見られない。六甲山の隆起運動の力が及ばなかったのが主因であるが、河岸段丘の発達が見られない流域である。揖保川下流域は、低地の沈降に伴って独立丘陵が数多く見られる。揖保郡の地名伝承となった「(飯)粒の丘」である中臣山や半田山などが、沈降に伴って生じた独立丘陵である。独立丘陵上にも多くの遺跡が繁かっている。

揖保川は、宍粟郡一宮町大身谷に源を発し、戸倉峠を源とする引原川と一宮町安積で合流し、中小河川を集めながら山崎町・新宮町・龍野市・揖保川町と南流し、河川の体をなしてくる。龍野市揖保町真砂で揖保川最大の支流である林田川と合流し、姫路市網干区興浜で播磨灘に注ぐ全長69.73kmの一級河川である。『播磨国風土記』では、林田川との合流点を「有紋の淵」と呼び、それから揖保川も字頭川と呼称していたようである。揖保川流域は風土記の遺称地も多く、また著名な遺跡も数多く知られている。

龍子周辺の遺跡の分布密度は高く、多くの遺跡が知られている。最も古い時代の遺跡は北方約4kmの龍野市神岡町大住寺皿地遺跡からナイフ形石器が出土している。大住寺皿地遺跡のさらに谷奥の大住寺奥池遺跡からも縄文早・前期の石礫などが採集されており、旧石器まで遡る遺物の存在の可能性もある。南約0.8kmの太子町坊主山遺



第19図 西宮山古墳跡と揖西平野



第20図 籠子向イ山遺跡・古墳群周辺の地形

跡でもナイフ形石器と有舌尖頭器の時期幅のある遺物が出土している。姫路市・向山遺跡でもナイフ形石器が確認されている。濃密な分布は示さないものの揖保郡内でも各地で旧石器時代の分布が見られ、分布状況に特徴は見られない。

縄文時代になっても遺跡数の増加はほとんどない。太子町常全遺跡・新宮町新宮宮内遺跡の土器がかろうじて図上で完形にな



第21図 半田山1号墓第1主体

るもので、資料が乏しかったが、宍粟郡・揖保郡を中心に徐々に増えつつある。特に宍粟郡では最近の圃場整備に伴う調査で押型文をはじめとして早前期の遺跡や中後期の集落跡も確認されている。林田川右岸の自然堤防上に築かれた龍野市片吹遺跡でも前期の土壌や中期末～後期初頭の住居跡が7棟調査され注目される。龍野市城の平地部での縄文遺跡の認識を大きく変えた遺跡である。姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡では遺構は検出されなかったが、中期～晩期の遺物が多量に出土しており、編年などの作業での基礎資料となるものである。揖西平野では遺構は北沢遺跡で確認されているだけである。他に小犬丸・清水の低地の2遺跡でも後期の土器が採集されている。ともに中垣内川とその支流の微高地上に営まれた遺跡である。

弥生時代になると遺跡は増加するが、前期段階では縄文時代と余り変化はない。丁・柳ヶ瀬遺跡・常全遺跡・龍野市門前遺跡のように縄文晩期後葉の遺物を出土している遺跡は、引続き存続し弥生時代の遺物を出土している。揖保川右岸の丘陵上で前期の墓が調査されている。揖保川町袋尻浅谷遺跡と半田山遺跡である。前者は土器棺を後者は土器棺・土壙墓が検出されている。常全遺跡でも前期の土器棺が確認されている。中期になると、遺跡数は確実に増えていく。龍野市揖西町内では、尾崎・佐江遺跡の平地の遺跡と養久乙城山・龍子向イ山・長尾タイ山の丘陵上の遺跡で生活を始めるが、中期でも後半の段階で終息している。また、平地の2遺跡で製塩土器が出土していることも特徴の一つである。揖保川以東の遺跡でも揖保川以西と同じく中期後半の単純遺跡が存在する。平地の福田天神・横内、丘陵上の中臣・内山・片山東山の各遺跡で、横内遺跡は前期からのムラである。内山遺跡は向山山塊の西端に位置する揖保平野東縁の丘陵上の遺跡で、その南方の平野部に林田川左岸に立地する福田片岡遺跡では、中期後半から古墳時代初頭にかけて集落が存続している。後期になると、福田片岡遺跡や揖保川町養久谷遺跡は持続して生活しているが、他のほとんどの遺跡は断絶している。それらに代わって集落が営まれるのが、揖西地域では、平野の清水遺跡、丘陵上の日山遺跡が揖東地域では、前期の遺跡である門前遺跡が生活を再開している。片吹遺跡でも後期後半から生活を再開している。弥生時代を通しての遺跡は、揖保川町養久谷遺跡唯一であるが、神岡町横内遺跡も母集



第22図 龍子向い山遺跡・古墳群周辺の遺跡

第1表 龍子向い山遺跡・古墳群周辺の遺跡一覧表

1	龍子向い山遺跡・古墳群	弥生中期～古墳後期	1982・1984年調査	32	片山東山遺跡	弥生中期～古墳後期	
2	龍子長山古墳群	古墳後期	1982年調査	33	小七神社境内遺跡	平安～鎌倉	
3	鳥坂古墳群	古墳前期～後期	1982・1983年調査	34	宮脇遺跡	平安～鎌倉	
4	龍子三ツ塚	古墳前期		35	片吹遺跡	縄文前期～平安	1982年調査
5	二塚古墳群	古墳前期～後期		36	宝林寺北遺跡	古墳初期～室町	1983・1984年調査
6	片島遺跡・古墳群	弥生中期～古墳後期	1980年調査	37	門前遺跡	縄文晩期～鎌倉	1970年調査
7	笹田古墳	古墳後期	1981年調査	38	中丘山遺跡・古墳群	弥生中期～古墳後期	
8	ニワトリ塚古墳	古墳後期		39	桜ヶ坪遺跡	弥生中期	
9	宿禰塚古墳	古墳中期		40	龍野城	室町	
10	那波野古墳	古墳後期		41	白鷺山墳墓群	弥生末	
11	大陣原壙跡群	平安後期	1960年調査	42	墓塚古墳	古墳後期	
12	竹原遺跡	平安		43	西宮山古墳	古墳後期	1954年調査
13	友ヶ谷古墳群	古墳中期	1986年調査	44	小神庵寺	白鳳～奈良	
14	長尾タイ山古墳群	古墳中期～後期	1980年調査	45	清水遺跡	縄文後期～古墳前期	1978年調査
15	小畑遺跡	奈良～鎌倉	1984年調査	46	牛田山墳墓群	弥生前期～古墳後期	1984年調査
16	尾崎遺跡	弥生中期	1975年調査	47	佐江遺跡	弥生中期～	
17	竹万遺跡	弥生		48	妻久乙城山遺跡	弥生中期～室町	1982年調査
18	池の谷墳墓群	弥生末～古墳後期		49	妻久山墳墓群	弥生末～古墳後期	1969・1982年調査
19	小犬丸遺跡	縄文後期～	1982～84年調査	50	赤山墳墓群	弥生末	1971年調査
20	新宮遺跡	弥生中期～		51	妻久谷遺跡	縄文～	1982年調査
21	新宮東山墳墓群	弥生末		52	神戸北山墳墓群	弥生末	
22	中丘内三味遺跡	古墳		53	神戸北山遺跡	弥生・古墳	
23	天神山古墳	古墳後期		54	神戸北山東遺跡	弥生～	
24	中丘内庵寺	奈良		55	サンマイ山墳墓群	弥生末	
25	熊雲寺墳墓群	弥生末		56	赤田古墳群	古墳	
26	景雲寺古墳群	古墳後期		57	山津屋遺跡	弥生～	
27	山根墳墓群	弥生末		58	宝記山墳墓群	弥生末～古墳	
28	中丘内古墳群	古墳後期		59	發尻浅谷遺跡	弥生～古墳後期	1976年調査
29	小神古墳群	古墳後期		60	金剛山古墳群	古墳前期～後期	
30	台山古墳群	古墳後期		61	金剛山庵寺	奈良	
31	北鹿野遺跡	弥生中期		62	真砂遺跡	平安	

落と思われ、今後の調査で全期間を通してのムラとなるかもしれない。

弥生時代末になると、揖保川流域の歴史上で最も特徴的な墳丘墓が現れる。著名な養久山をはじめ、半田山・池の沢・西宮山（日山）・白鷺山・新宮東山・宝記山・内山・笹山・明神山などの墳墓群である。揖保川流域の龍野市から河口部まで構築されている。三ツ塚山塊では、今のところ墳丘



第23図 鳥坂2号墳主体部

墓は確認されていないが、時期不明の墳丘があり、養久山と鳥坂峠を隔てて繋がった丘陵であることを考慮すれば、今後確認される可能性は十分に考えられる。

古墳時代前期の古墳は揖保川流域では新宮町吉島古墳、龍野市・揖保川町の境界に位置する龍子三ツ塚1・2号墳、養久山1号墳が築かれる。龍子三ツ塚2号墳を除いて、主体部は竪穴式石室である。ただ、畿内の通有の竪穴式石室とは用石法が異なり、木口積みではない。最近、揖保川上流の播磨国一宮である伊和神社東側の尾根上に築かれた伊和中山1号墳も前期末の前方後円墳で竪穴式石室を内部主体とする。前期の古墳は吉島古墳より下流に存在していると考えられていたので、揖保川流域の歴史を考える上で大きな変化を与えた古墳である。揖保郡内では、流域は異なるが丁・瓢塚古墳も同時期の古墳である。揖保川河口付近に築かれた興塚古墳もやや遅れた時期に構築された盛期の古墳で、対岸の綾部山古墳群とともに海岸部に営まれた古墳である。下流域の丘陵には、金剛山・権現山・岩見北山など前期の古墳が確認されている。権現山51・52号墳、塚特山1号墳は前方後円墳で特殊な墳形をしている。

中期の古墳は減少し、片島古墳群・長尾タイ山4・10号墳・宿禰塚・鳥坂3号墳など僅かに見られるだけで、資料は乏しい。古墳ではないが、龍子向イ山遺跡溝状遺構はこの時期の遺構である。揖保川以西に今のところ限られており、揖保川以东には存在せず市川流域まで確認さ



第24図 鳥坂3号墳出土鏡

れていない。6世紀代になってもその傾向は変わらず古墳数は少ない。養久山41・43号墳・長尾タイ山古墳群や揖西町中垣内の天神山古墳・揖保川町笹田古墳は、この時期の古墳で横穴式石室導入前の古墳である。横穴式石室を最初に採用したのは、最後に築造された前方後円墳である西宮山古墳である。全長34.6mで2列の埴輪列を有しており、後円部中央に南に開口する石室が存

在している。幅3.4m、長さ3.8mの正方形に近い女室の左片袖式の石室で、壁体構造から穹窿式の石室と考えられる。排水溝が施されており、玄門部と羨道中央に境界石が置かれている。出土遺物は、装飾付台付壺・器台・壺などの多数の須恵器と垂飾付耳飾り・銀製丸玉・銅製三輪玉・琥珀製葉玉などの玉類の装飾品、杏葉・雲珠などの馬具類、獸形鏡と豊富である。西宮山古墳と同時期の初期横穴式石室の古墳は、墳形が同じ前方後円墳である御津町小丸山古墳のほか長尾タイ山1号墳、姫路市丁山頂古墳、新宮町馬立古墳群中の姥塚古墳などと揖保川中下流域全体に点在している。

6世紀後半～末になると各地に古墳が繁かれ始め、龍子向イ山古墳群もこの時期に相当する。ほとんど余ての古墳は丘陵上に立地しているが、中には中井古墳群のように平坦面に単独墳的に存在する例もある。他地域のように群集している例は少なく、2～10基の古墳群がほとんどで、まれに山頂近くに1基存在する例がある。中垣内・内山・馬立・丁の各古墳群が群集する代表例である。龍野市域の傾向としては、揖西平野北縁の分布状況が稠密である。大形の横穴式石室も市内では、中井1・2号墳と上記の地域の中垣内1号墳・狐塚古墳がある。郡内に目を広げれば、新宮町天神山古墳・相生市那波野古墳・姫路市西脇所在の古墳・御津町正玄塚が挙げられる。立地条件も異なり、単独墳と群集墳中の1基と性格も異なっている。ただ、中井1・2号墳のみが立地条件が他と異なり平坦面上に位置している。なお、中井古墳群中にも南東の山腹に中井4号墳と呼ばれる通常の横穴式石室を主体部とする円墳が存在している。径10m前後の古墳で、1・2号墳とは性格を異にすと思われ、揖西平野では北縁の山腹に中垣内・小神・景雲寺古墳群など10基以上で構成される古墳群であるのに対して、南縁では龍子向イ山古墳群の5基を最高とする構成数の少ない古墳群である。

龍子向イ山古墳群も古墳時代末に近い時期の古墳であるが、さらに遅れて築造を始める古墳群も存在する。龍野・姫路市境でもある槻板を隔てた東側にある姫路市西脇古墳群である。現在調査中であるが、古墳の集中度では県下でも1・2の密度で小規模なマウンドを有するものも含めて70基以上が確認されている。明らかに造墓活動は、終末期を中心とするものである。奈良時代の蔵骨器も検出されている。終末期の古墳として、他に神岡町大住寺の野森古墳や惟現山古墳群中の小規模の古墳がある。小型の箱式石棺を石室内に保有している。

奈良時代になると、山陽道沿いに古代寺院が現れる。中井廃寺・中垣内廃寺・小神廃寺（以上龍野市）、西脇廃寺（姫路市）で他に瓦出土地が数地点と駅家に推定され



第25図 中井2号墳



第26図 宝林寺北遺跡中世墓

で、塔心礎・石製露盤が現存している。現在観音堂のある付近から瓦が多数出土し、礎石も残っているので建物（堂塔？）の存在が推定される。瓦当の種類も多様で、鬼面文の軒丸瓦と鷲尾が注目される。また、東方約150mの山裾に瓦窯があり、中井廃寺に供給された瓦の窯跡である。全長4.1mのロストル式の平窯である。需給関係の判る数少ない資料である。当初の山陽道も時期が下るにつれ、間道であった向山南側の斑鳩寺への道が主流となっていく。山陽道以外にも南では下太田廃寺（姫路市）金剛山廃寺（揖保川町）があり、美作道沿いに奥村廃寺（龍野市）越部廃寺（新宮町）が存在する。

揖西平野でも南縁部では遺跡が確認されていない。最後の前方後円墳である西宮山古墳築造以後北縁部の方が遺跡の密度が高い。しかし、南縁部の龍子向イ山1・2号墳での石室内の火葬を行っていることや龍子長山1号墳・龍子向イ山1号墳での石室の再利用などが行われている事実がある。今のところ文化の差と考えた方が良く思うが、他に意味があるのであろうか。

太子町に斑鳩寺が聖徳太子により建立されて、船荘として法隆寺の荘園となり、荘園を主体とする歴史が変わっていく。時期が下るにつれ、周辺地域は押領を受け減少していき、周囲に広山荘さらに外側へ小宅荘が設けられていく。龍子向イ山北側一帯は景勝光院領桑原荘に含まれていたようである。古墳時代後期に須恵器生産が龍野市周辺で行われるようになる。中井をはじめ姫路市大市～青山にかけての丘陵、御津町礎岩、相生市丸山で開始され、断続的ではあるが生産が行われ、平安時代になると相生窯跡群として一大産地となる。須恵器生産と荘園の在り方が当地域の特徴となる。揖西平野の西縁である光明山から延びる丘陵上の竹原・大陣原にも窯が築造されており、揖西地域も相生窯跡群の一部として須恵器生産を行っていたようである。

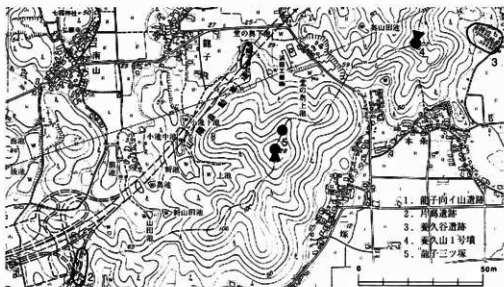
ている向山遺跡（太市駅推定）小犬丸遺跡（布勢駅推定）が存在する。小神廃寺は播磨最古の寺院の一つであり、飛鳥時代に遡る瓦が出土していると伝えられているが、明らかでない。古墳時代末の大型石室出現期から古代寺院の造営期にかけて律令期山陽道沿いの遺跡分布が卓越する傾向にある。中井廃寺は、中井古墳群と谷向こうに位置し、寺域の北限を山に接して配された寺院

第3章 龍子向イ山遺跡

片高遺跡の弥生中期集落跡の存在を確認したことによって、掛西地域の丘陵上の遺跡の調査方法は少なからず変化した。龍子向イ山遺跡の立地も日照時間の長い緩斜面であることから、集落跡の可能性が考えられ、確認調査によって中期後半の集落跡であることが判明した。

確認調査は、古墳状隆起に入れたトレンチも下層弥生集落跡の確認を兼ねている。北地区では6本のトレンチを設定して、約258㎡の確認調査を行ったところ、約890㎡が全面調査を必要とした。調査は龍子神社の遷座の時期のため、昭和57年度に650㎡を昭和59年度に240㎡を調査した。2トレンチによって溝状遺構も集落跡とともに確認され、H08を中心に全面調査を実施した。溝状遺構北側（8ライン以北）で近世・近代に下る石組などが検出され、弥生時代の遺構は検出されなかった。石組は、龍子神社の旧参道に伴うものと思われる。

南・北地区間谷部で2本、南地区で4本のトレンチを設定したが、遺構は確認されなかった。南地区の12トレンチで1・4号墳から流失したと思われる短頸壺をはじめ須恵器片が出土しているだけで、他のトレンチからは遺物は出土していない。昭和59年度に尾根上に1本、東斜面に2本のトレンチを入れて調査したが、遺跡は広がっていない。その結果、北地区の尾根上と西斜面に限って遺構が存在していることが判り、全面調査を実施した。弥生時代中期後半の一時期に限られる集落跡で、住居跡3棟、溝状遺構2基と、古墳時代中期の溝状遺構、近世～近代の石組を調査した。

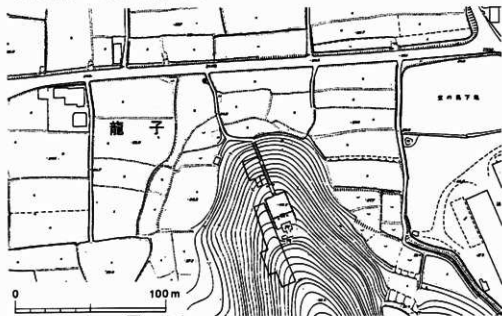


第27図 龍子向イ山遺跡の位置と周辺の遺跡

第1節 弥生時代集落跡

1. 立地

三ツ塚古墳が築かれている標高127mを頂上とする尾根から四方へ支尾根が延びている。北西側へ延びた尾根からさらに派生した支尾根末端に近い尾根上およびその西側山麓斜面に遺跡は広がっている。尾根部分に龍子神社が鎮座している以外は、雑木林になっていた。支尾根は、三ツ塚山塊では最も北側へ延びている尾根で、尾根上に平坦面はほとんど見られない。用地外の支尾根頂上は、やや平坦面が広がっているが、表面観察においては遺物は採集されていない。遺跡は、標高32mから45mまでの垂直方向に広がっている。平面的には、底辺60m、高さ45mの三角形上に広がっている。龍子向イ山3号墳丘や墓竈埋土中から出土しているが、1次堆積の遺物は確認出来なかった。3号墳から包含層のG11まで15mの間は山腹の斜度が急になり、遺構・包含層は存在しない。尾根上は神社のため損壊を受けているので不明であるが、神社上方には遺跡は広がっておらず、尾根上に遺構は存在しなかった可能性が高い。地形的に3号墳上方はやや急斜面になっていることから、36-40mの間は遺構は存在せず、40m以上の尾根上から1段下がった緩斜面部分と、1・2号住居跡の存在する33m前後の緩斜面部分に遺構が築かれていたものと思われる。下の緩斜面部は戦後の開墾などで旧地形を残しておらず、1・2号住居跡のみが残存していたものと思われる。支尾根西斜面は、日照時間も長く、風をある程度防げる地形になるため、集落を営んだものと思われる。斜面は緩いところで10°前後で、急な部分で25°近くの斜度である。



第28図 龍子向イ山遺跡の位置

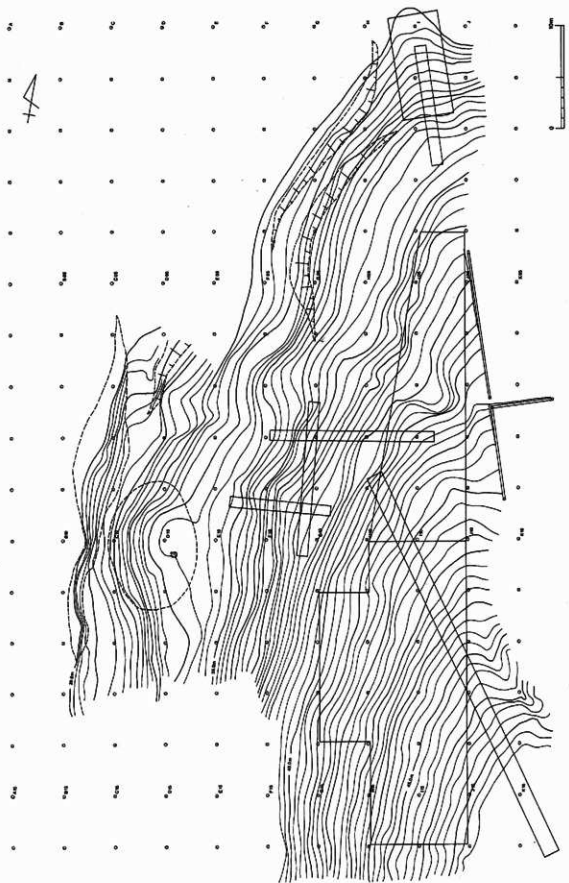
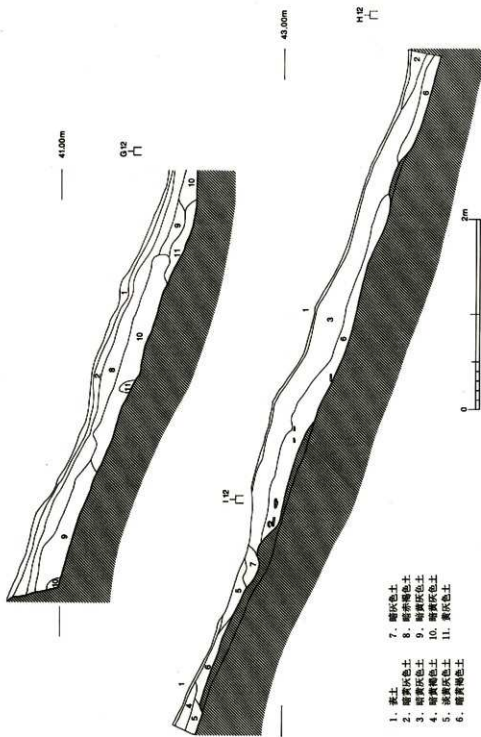
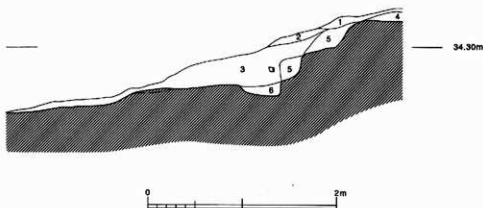


圖 25 山岡山地形圖



第30図 糠子向イ山遺跡土層断面図



1. 表土 2. 暗黄褐色土 3. 暗褐色土 4. 黄褐色土 5. 暗黄褐色土 6. 暗褐色土

第31図 6トレンチ土層断面図

2. 住居跡

① 1号住居跡

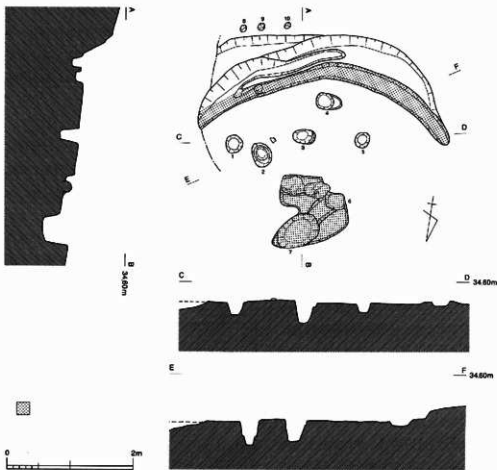
龍子神社参道西側の尾根上で検出した竪穴住居跡で、丘陵下の水田面との比高差は10m余りを測る。住居跡は2基の住居跡の切り合い関係にあるのか、住居の拡張であるのか明らかにしがたい。概報段階では、別個の住居跡と考えたため小見出しで1号・2号と分けたが、確実に別の住居跡であると断言は出来ない。しかし、床面は共有するものの平面プランで、拡張でなく切り合いに見えるので便宜的に2基の住居跡と考えた。床面の一部しか残っていないため、決定資料に欠けるのは事実である。

周壁が残っており、残存部が多い方が1号住居跡と呼称した。龍子向イ山遺跡の中では残存状態の良い遺構であるが、それでも斜面の下方は残っておらず、周壁をはじめ塹溝など流失している。周壁から見ると全体の約4分の1程度残存していることになるが、床面はそれ以上残っている。周壁から復原すると、径5～6mのやや楕円形を呈する比較的小型の竪穴住居跡となる。周壁は最も残っているところで0.55mを測る。床面では、ピット5基と焼土塊1基を検出しているが、埋土の違いと床面での位置関係から焼土塊は2号住居跡に伴うものと考えている。ピットは、どちらの住居跡に所属するかは明確に出来ない。ただ、上屋構造を推定すると今のところは2本柱を考えるのが妥当と考えられるが、欠失した床面の遺存を考慮すると4本柱になるかもしれない。

周壁の上から小形のピット3基が検出されている。径10cm前後の小さなもので垂直にならず住居跡中央方向に向かって斜め方向に穿たれており、垂木穴ではないかと思われる。出土遺物は少量で塹溝上面から壺口縁部が出土しているのをはじめ壺・甕・器台が出土している。全て磨滅が著しく保存度は良好とは言えない。

② 2号住居跡

1号住居跡とはほぼ平面を共有する竪穴住居跡である。尾根部の標高の低い方の北側へ僅かにずれている。壁溝から復原すると、1号住居跡より規模は大きくなるものと思われる。図上では2号住居跡壁溝が1号住居跡を切っているように表現しているが、レベル差で2号住居跡壁溝が下層で確認されている。出土遺物から時期差を知ることは出来ず、短期間に築かれた住居跡である。壁溝は後出する1号住居跡による削平と自然流失によって一部しか残っていない。床面は、同一面の可能性もあり、層的に面を2面検出していないことや壁面の深さの差がないことから想像される。壁溝は弧状に420cm残存しており、弧から復原すると径490cm前後の円形住居跡になる。幅は20-30cmで、深さは6-10cmしか残存していない。東側は1号住居跡と共有している。南側にややずれて1号住居跡が築かれていることから周壁は全く残っていない。壁溝が繋がる手前で底部が出土している。床面には5基のピットと焼土塊を1基確認している



第32図 籠子向い山遺跡1・2号住居跡実測図

が、1・2号のどちらの住居跡に伴うかは明らかでない。焼土塊の位置関係を考えると、1号住居跡では周壁近くになり、2号住居跡ではほぼ中央に位置することから、2号住居跡に属するものと考えられる。焼土塊は簡単なながら構造的なものである。不定形に最大長130cmを5～10cm掘り下げ、北側2辺に接して長径72cm、短径46cmの楕円形の大形のピットを深掘している。埋土は暗褐色土中に焼土・炭を多く含んでおり、底は平坦で約40cmの深さを測る。対角線の位置に径30cmのピットがあり、25cmの深さを測る。2つのピットは、深さ15cm、幅30cmの溝で連結している。溝の肩部を中心に焼成を受けている。溝東側に地山中の礫を2石据え置いている。ともに強く火を受けており、赤変している。ピット上部・溝肩部・溝底部・礫と火を受けていることと、炭・焼土が多く出土していることから炉の機能を持った遺構である。機能を考えるなら、溝の西側にも当然礫が存在したものと思われ、壘などを置く台石となったものと思われる。大形のピットが灰原に、溝が焚口となる構造的な屋内炉と考えられる。



第33図 焼土塊

③ 3号住居跡

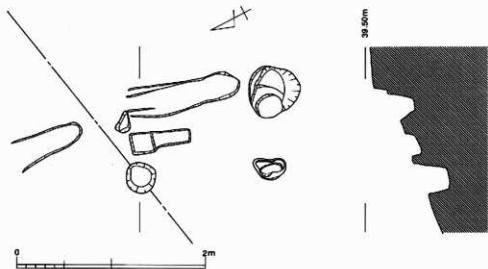
H08の緩斜面上に位置する遺構で、溝とピットを検出している。住居跡と断定するには決定資料にかけているが、溝のあり方や埋土の状況から住居跡と考えている。確認調査段階で分断しているが、2本の溝と4基のピットを周辺で確認している。全てのピットが住居跡に伴うものとは思われない。溝は復原すると緩やかな弧状を描き、住居跡の壁溝の可能性が高い。しかし、残存した弧から径を復原するまでは残存していない。溝が弧状を呈することから、標高の高い方の壁溝と思われる。壁溝は、幅30cm前後で約260cmを測り、深さは5～10cmと残存状況は悪い。東側の標高の方にあるピットは径40cm、深さ20cmを測る。壁溝の内側に幅18cm、長さ60cm、深さ5～10cmを測る溝がある。短い直線的であるが、住居跡の拡張を考える根拠になるかもしれない。垂直に掘り下げられており、住居跡とは関係ないかもしれない。壁溝の両側に径60cmを測る大形のピットがある。深さ48cmと深いもので、3段に掘り下げられている。焼土・炭などは検出されず、埋土は包含量を同じ暗灰灰色土である。壁溝内側にも2基のピットがあ



第34図 3号住居跡

る。北側の方が円形でやや大きく、径32cm、深さ24cmを測る。南側のは最大長30cm、最小長21cmの不定楕円形で深さは34cmとやや深い。埋土は暗黄灰色土で有機質を含んでいる。住居跡の柱穴と考えて大過ないピットと思われる。全体に後世(5C.前半)の溝状遺構によって大きく損壊を受けているため、多くは判らない。また、自然流失や戦後の開墾によっても旧態を損なわれている。

出土遺物は、弥生土器片に限られる。図化出来るものはないが、龍子向イ山遺跡の時期である中期後半の円形住居跡と考えられる。ただ、ピット埋土・溝上層から壺口縁部や高杯脚部が出土している。



第35図 3号住居跡実測図

3. 橋状遺構

ピット列から単に橋状遺構とする橋状遺構2と、他の遺跡で地山整形遺構・段状遺構と呼ばれている地山をL字形に削り出した遺構を伴う橋状遺構1の2基を確認している。ともに性格を構もしくは、それに類する遺構と考えているため、橋状遺構として扱う。開墾などの削平によって橋状遺構の下方に遺構は存在しないが、土砂や獣を防ぐための欄と思われ、下方に住居跡などの生活遺構が存在したと思われる。

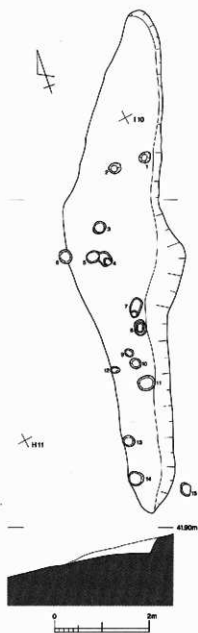
①橋状遺構1

全面調査を実施した区域のほぼ中央に位置する。HI09-11に位置し、確認調査のトレンチにより確認した遺構である。地山整形とピット群の複合した遺構である。地山整形は等高線に平行に築かれており、10.5cmの距離を測る。掘削された深さは、最深部で0.32mを測り、中央部分は0.25m前後の段差である。中央部分で斜度が約45°と緩くなり広がった部分があるが、

第2表 櫛状遺構1ピット計測表 (cm)

ピットNo.	最大径	最小径	深さ
1	27	24	20
2	24	22	25
3	30	26	9
3b	25	20	13
4	32	26	16
4b	13	13	8
5	25	25	20
6	30	26	22
7	42	25	19
7b	14	12	4
8	29	24	10
8b	20	17	8
9	21	16	18
10	21	21	18
11	36	30	23
12	18	14	15
13	23	23	28
14	32	28	29
15	28	20	24

bは深掘されるピット



第36図 櫛状遺構1実測図

②櫛状遺構2

G12に位置する櫛状遺構で、集落跡の南西端にあたる。北側は斜面が急になり遺構は存在しない。ピット16基で構成されている。ピットのデータは第3表の通りで径10~20cmのものが多

全体的にはほぼ直線的に築かれている。中央付近は後に崩れた可能性もある。中央の緩斜面を除くと、斜度は $70^{\circ}\sim 80^{\circ}$ の急斜面となっている。地山整形に伴って平坦面も築かれており、最も広いところで1.95mを測る。地山整形の築かれている斜面は、上方はやや急で下方は緩やかな斜面になっている。

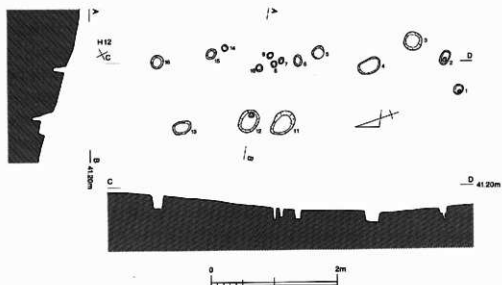
平坦面上に14基のピットが見られる。直線上に並んでいないが、2基を除いてほぼ2列となり地山整形と平行に並ぶ。並ばないピットは平坦面中央の端部に1基と地山整形下端に1基築かれている。大半のピットは径0.2m前後で最大のピットは0.42mを最小のピットは0.14mを測る。平坦面の南西側2.8mにはピットは築かれていない。ピットの計測値は計測表の通りである。地山整形の北東端の上方にも1基ピットが築かれている。直接的に関係があるかは不明である。

く、大きいものは最大径43cmを測る。斜面の下方に存在する方が径が大きい、上方の12基のピットは直線ではないが、並んでいる。柵状遺構1のように地山を整形した段は伴わないが、下方の上留めなどの柵と考えられる。ただ、直下には遺構は残存していない。遺物は、ピット内からは同化出来る土器は出土していないが、ピット2・3・8・11~14で土器が確認された。一部甕の破片と判断出来るが、ほとんど器種などわからない破片で、よく磨滅している。

第3表 柵状遺構2ピット計測表 (cm)

ピットNo.	最大径	最小径	深さ
1	15	14	7
1b	7	7	9
2	24	16	6
2b	8	6	8
3	28	28	25
4	34	26	19
5	20	16	15
6	16	12	14
7	11	9	13
8	10	9	19
9	12	8	17
10	13	10	18
10b	10	9	14
11	43	30	32
12	40	27	22
13	30	21	19
14	10	9	16
15	15	12	20
16	20	20	19

bは深掘されるピット



第37図 柵状遺構2実測図

4. 出土遺物

龍子向イ山遺跡出土遺物は土器・石器である。出土量が多いとは言えず、コンテナ（セキス

イTS-28タイプ)に土器18箱、石器2箱である。土器は丘陵上の遺跡特有の脆弱な器質である。

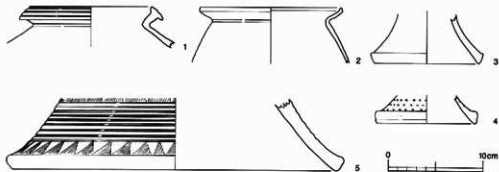
(1)土器

①1・2号住居跡の土器

上層埋土を除き、住居跡床面上の埋土下層と壁溝・柱穴・炉埋土を対象とする。総数604点の土器を出土しており、その内器種が判るものは43点で、その器種別に見た内訳は壺19点、甕15点、高杯3点、鉢5点、器台1点である。点数のうち明らかに同一個体となるものは数えていない。出土層位は埋土からが大半で、全体の81.3%である491点が出土している。図化したものは甕2点、器台1点、脚台部2点の5点である。脚台部は便宜的に不明なものは全て高杯として数えている。

(1)(2)は甕で住居跡埋土から出土している。(1)は復原径13.0cm、残存高3.8cmの中型の甕で、口唇部に3条の凹線を有する内外面に肥厚した口縁部である。頸部は短く鋭角で屈曲している。(2)は薄く仕上げられた甕で、磨滅しているが焼成・胎土の良好な土器である。外面にスガが付着している。復原径15.0cmを測り、端部を上方につまみ出している。(3)(4)は脚台部で、(3)は裾径10.8cmとやや大型のもので高杯脚部と考えられる。(4)は裾径10.2cm、残存高2.0cmを測り、裾部端面に凹線を施していたようである。外面に貫通しないクシによる刺突文を施している。端部はヨコナデ仕上げと思われる。加飾していることなどから台付無頸壺・鉢の脚台部と思われる。(5)は大型の器台で炉跡の上面から出土している。色調は淡褐色～赤褐色を呈しており、胎土は緻密である。全体にヨコナデで仕上げられており、龍子向い山遺跡の土器のなかでは残存度の良い土器である。下台部径34.2cm、残存高7.4cmを測る。裾から複合鋸齒文・凹線文・鋸齒文と加飾している。凹線文は7条あり、鋸齒文は右上りの斜線をクシで描いている。

図化していない土器も含めると壺44.2%、甕34.9%、高杯7.0%、鉢11.6%、器台2.3%である。壺と甕で大半を占め、壺の占有率が最も高い。壺の中には内面に突帯を有する(壺B₂)ものや内外面に口縁端部が肥厚するものがほとんどである。1片ずつであるが長頸壺と把手部も出土しており、丹を塗った破片も炉跡上面から出土している。丹塗した土器は壺胴部上半でク



第38図 1・2号住居跡出土土器実測図

シ描き直線文が施されている。壺の破片には波状文や刺突文・突帯も見られる。

第4表 1・2号住居跡出土土器観察表

No	器種	色調	法量 (cm)			形態	技法	備考
			口径	底径	器高			
1	壺	淡褐色	(13.0)	—	(3.8)		口縁部のみヨコナデ	
2	壺	外黒黄褐色-黒灰色 内)淡黄褐色	(15.0)	—	(5.8)	口唇部内側に肥厚する	口縁部のみヨコナデ	外面スス付着
3	脚台	①淡黄褐色-黒灰色 ②③) 淡黄褐色	—	(10.8)	(5.2)	裾端部内外面に余り肥厚しない	裾部ヨコナデ	
4	脚台	淡黄褐色	—	(10.2)	(2.9)	裾部外面に肥厚、膚面中央凹入している。	外面刺突文巡らす	
5	器台	淡赤褐色	—	—	(7.4)	裾部ほとんど肥厚せず角張り気味、直線的	複合刺突文帯1帯、7条の凹線文、ヨコナデ	

②住居跡以外の土器

欄状遺構・溝状遺構・住居跡3出土の土器は小片で図化出来るものはない。龍子向イ山3号墳墓墳埋土からも出土しているが、時期の違う遺構のため包含層の土器と同等に扱うものとする。統計的数値は押えていないが、住居跡出土の比率と大差ないように思われ、器種構成は壺・甕・鉢・高杯の順である。高杯脚台部は保存度が良いことから実測点数は多くなっている。図化した点数は、壺41点、甕27点、甌4点、鉢10点、ジョッキ形土器1点、器台3点、高杯21点、不明土器2点の109点を実測した。以下器種ごとに記述する。分類は、播磨で中期土器を最初に分類した「川高遺跡」に基本的には従うこととする。しかし、その後龍子向イ山遺跡の北西約1kmに所在する尾崎遺跡で細分が行われている。遺跡の位置も同地域で土器の様相も近似しているが、やはり異なっている面もある。そのため、両書に従いながらも若干の差異を有して分類することとする。完形品がほとんどないことから口縁部の形態・技法を中心にして分類する。

土器の器形分類

壺を4種に甕を2種に大別可能である。しかし、高杯・鉢などは完形品がなく小破片の資料しかないので、分類することに問題があると思われ、分類は行わないこととする。

壺Aは唯一完形品0点があることから全体像を理解することが出来る。球形からやや算盤形に近い胴部を持ち、短めの外反する口頸部へと続く。口縁部は内面へ肥厚せず外面のみ肥厚するものである。内面突帯の有無によって細分が可能である。壺Bは壺Aに似たタイプであるが口縁部が内外面に肥厚するものである。口唇部に凹線の有るものとなないものがあり、細分の模範となるかもしれないが今報告では採用していない。壺Aと同じく内面の突帯の有無で細分し、突帯のないものを壺B₁、有るものを壺B₂とする。壺Aと違い、全て口唇部に凹線文が施されている。壺Cは頸部の短い直口壺である。直線的に伸びるものを壺C₁に、外反した口縁がやや内彎気味に直立するものを壺C₂とする。壺Dは垂下する口縁を持つものである。壺Eは無頸壺で

ある。

壺はくの字形の口縁部を持つものを壺Aに、くの字ではあるが口縁部がバチ形もしくは内外面に肥厚するものを壺Bに分類する。壺Aは、単純にくの字形のものを壺A₁に、内面つまみ上げているものを壺A₂に細分される。また、壺Bは口唇端面に装飾を持たないものを壺B₁に持つものを壺B₂に細分する。

壺A₁ [(1)(2)(6)(9)]

内面に肥厚しないものであるが、(1)のように稜線がないものもある。川島遺跡壺形土器A₁に相当するものと思われる。4点とも口縁端面に凹線文を有する。(2)は棒状浮文を(9)は円形浮文を端面に付加している。(9)は4個単位の円形浮文で、4ヶ所に施文しているものと思われる。胴部上半にもクシ先列点文が見られる。

壺A₂ [(6)(7)(9)]

内面に突帯を有するもので、(6)は3条、(7)は1条、(9)は2条の突帯を有する。口縁全体の形態も(6)(7)と(9)は異なっている。尾崎遺跡ではA₂とB₂を合わせて壺形土器A₁に分類されている。(6)(9)は口縁端面に刺突文ののち円形浮文を施文している。(6)は4個単位、(9)は3個単位である。(9)は数少ない完形品で、器高32.6cmのほぼ中位に最大腹径31.4cmをもってきている。最大腹径の部分に3個単位の円形浮文を付けており、その上下に2列のヘラ先刺突文を施す。全体的に磨滅して不明であるが、施文は1周していたものと思われる。現状では黒斑部分が保存状態が良好なことから土器の正面観があるように見えるが、磨滅を考えると断定はしかなる。頸部には2条の貼付突帯があり、口縁内面の突帯には刻目が施されている。また、2条の突帯間に2孔が1対となる円孔が4ヶ所焼成前に直交する位置に設けられている。胴部下半にはヘラミガキが見られ、丁寧に作られた土器である。

壺B₁ [(3)(4)(5)(7)(8)(11)]

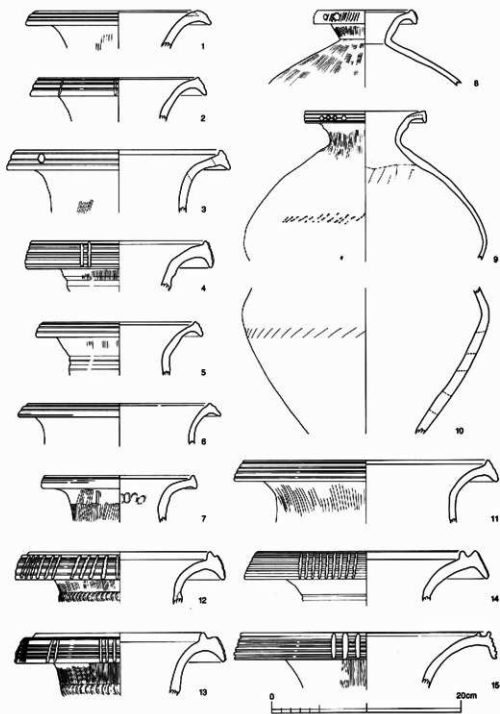
(8)を除いて端面に凹線文が施されている。(3)(8)には円形浮文が、(4)には棒状浮文が付けられている。(8)は壺A₂の(6)(9)と同様に浮文の前に端面にヘラ先刺突文が見られる。(3)などや頸部が長いものや大形のもの(11)の細かな差も看取される。

壺B₂ [(12)~(19)(8)]

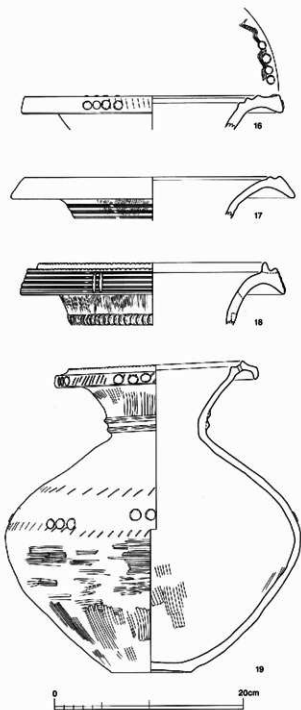
内面に突帯を持つもので、龍子向イ山遺跡のなかで最も多い数を占める形態である。図化したものは全て端面に凹線文を行い棒状浮文で加飾している。棒状浮文のタイプは各種あり、3個単位や9個単位と数には変化がある。頸部に突帯を付け、指圧痕を施すものが(12)(13)(18)と3点ある。

壺C₁ [(20)(22)]

直口壺のなかで、外開きで直線的に伸びる形態である。(20)は内面に肥厚している。頸部に指圧痕を施した突帯を有し、端面に刺突文が見られる。(22)も突帯が見られるが、装飾は施してい



第39圖 弥生土器実測圖(1)



第40図 弥生土器実測図(2)

ない。川島遺跡壺形土器C₃に相当する。

壺C₂ (21x23)

2個体を1形態にしたが、本質的には2種に分けるべきかもしれない。21は外方へ開く口縁が途中で屈折して上方する直口壺で、川島遺跡壺形土器Bに相当する。23は直線的に外方へ広がったのち内彎気味に立ち上がる。頸部に指圧痕を有する突帯を持ち、全体的に凹線文で飾る。尾崎遺跡ではC₁・C₂を含めて壺形土器C₃に分類されている。

壺底部 (29-41)

13個の底部を図化した。当然ながら分類は不可能である。39は外面にハケで文様状に強く施文している(図版46)。41にはタタキメが見られる。

甕A₁ (4249606566960)

単純なくの字のタイプで42は完形品である。薄く仕上げられており、外面は全体的にハケメで整形されている。口縁部のみヨコナデで仕上げている。強いヨコナデのため稜線が生じた土器も6960に見られる。59は口縁を折り曲げただけの粗製品で器肉も厚い。

甕A₂ (43-4757)

くの字形の口縁部だが、内面に肥厚させているものである。A₁同様大型土器も含まれる。47をは

じめ薄く仕上げられている。A₂の中には時期的に古い時期のものもあるかもしれない。

甕B₁ [485-488]

口縁端面が明らかなもの・外面に肥厚させているものを甕Bとし、凹線文の有無で細分した。B₁は凹線文のないものである。54は端面に刺突文を施し、円形浮文を付加している飾られた甕である。

甕B₂ [515-513]

端面に凹線文を有する。63は円形浮文も有する

甕B [69-72]

甕底部で4点とも焼成前の穿孔である。器壁が荒れており、表面磨滅している。69は内面煤化している。

鉢 [73-82]

大型土器73-79の3点は鉢に間違いがないが、他の7点は高杯か鉢か決し難い。とりあえず、鉢としておくが、不明である。口縁端部は面をなし、内外面に肥厚するもの73-78と外面に肥厚するもの79がある。突帯に刻目文を有するものも73と2点ある。

ジョッキ形土器85

包含層中から1点出土している。残存高13.9cmで上下とも端部は残っていないが、ほぼ全容を推定出来る。裾部の復原径は14.4cmで器高は16cm前後と思われる。裾部に2段の三角形透孔を巡らしている。上段透孔の上に刺刺した面が見られ、底が欠失したと思われる。内面の一部にヘラケズリが見られ、内外面ともハケ整形している。上段透孔部分に把手が付けられている。タテ方向の把手で上部は欠失している。

高杯 [83-88-90]

脚台部は全て高杯の中に入れていますが、当然鉢もしくは無頸壺の脚台も含まれているものと思われる。特に83は高杯でない可能性が高いと思われる。

前述した鉢の項で扱った中に杯部が含まれている。鉢形の高杯と木器模倣形高杯の両者があり、比率は近いものと思われる。木器模倣形高杯は図化していないものも含めて同一タイプで内面に突帯を有するものや口縁が垂下しないもの（川島遺跡・尾崎遺跡高杯形土器B₁）は含まれておらず、龍子向い山遺跡の消長が短期間であることを示している。杯部と脚台部の接合は残存しているものは全て円板充填法によるものである。

器台 [99-100]

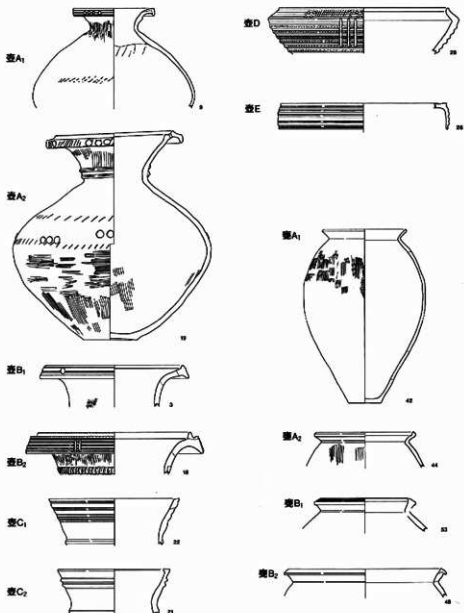
大型の器台99と中型のもの100がある。他に大型の器台の破片が数点あるが、量は少ない。装飾を加えるものとなないものも同数であろう。

器種不明土器 [100]

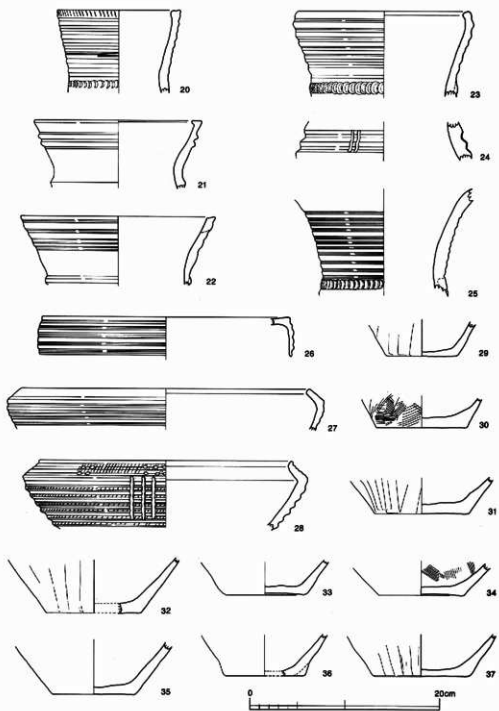
100は壺の頸部と思われるが、径がやや小さく断定は出来ない。壺なら頸部の屈曲点に当たり、

突帯部分に相当する。

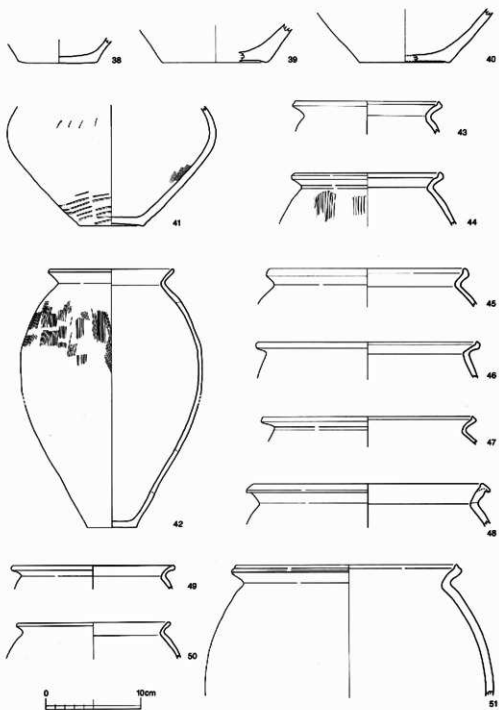
④は底部のように見えるが、端部の一部が生きた面で通有の底部にはならない。口の開いた異形土器になるかもしれない。小片のため全体像は推定出来ない。直径8.0cmの半円形で異形土器と考えるか、把手の可能性も考えられる。



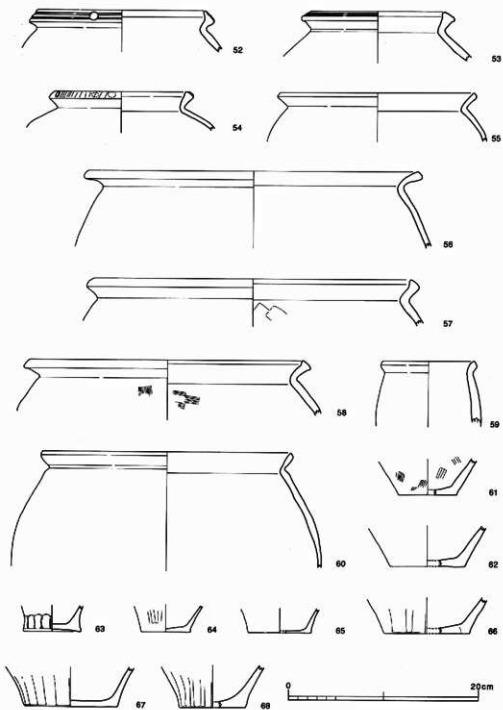
第41図 器形分類図(壺・甕)



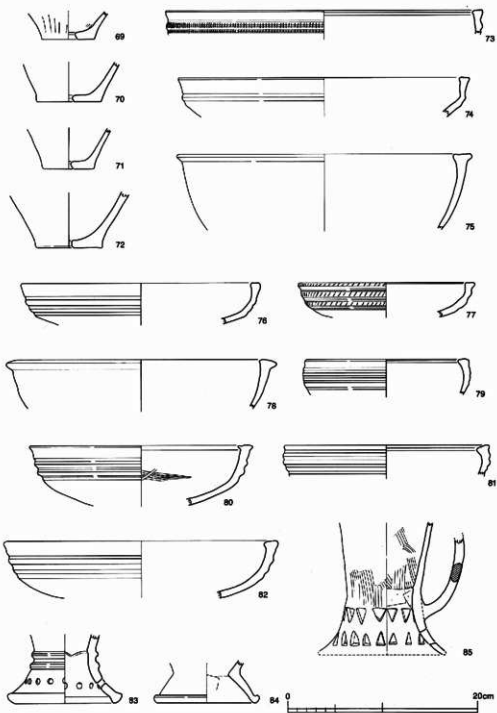
第42图 弥生土器実測图(3)



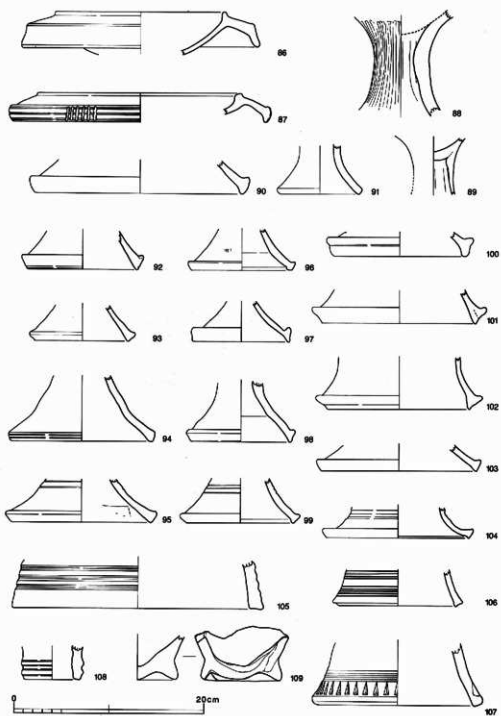
第43图 弥生土器实测图(4)



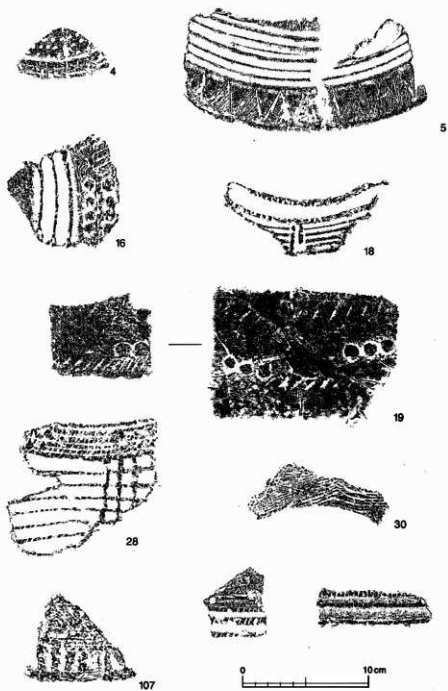
第44图 弥生土器实测图(5)



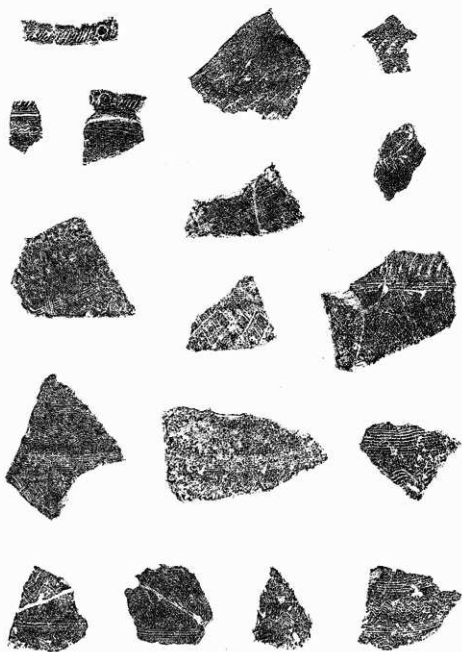
第45図 弥生土器実測図6)



第46图 弥生土器实测图(7)



第47圖 弥生土器文様拓影(1)



第48图 弥生土器文様拓影(2)

第5表 住居跡以外出土土器観察表

No	器種	色 調	法 量 (cm)			形 態	技 法	備 考
			口径	底径	器高			
1	壺A ₁	淡黄褐色	(17.2)	-	(3.9)	内面明らかな稜線持たない。	外面4本/cmのハケ。口縁部ヨコナデ。	
2	壺A ₁	淡黄褐色	(16.0)	-	(4.5)		ヨコナデ。円織3条ののち棒状浮文。	
3	壺B ₁	淡黄褐色	(21.0)	-	(6.6)	端面内外面に肥厚。直立ののち屈曲する。	凹線文ののち円形浮文貼付ける。単位不明。外面ハケ整形ののちヨコナデ。	
4	壺B ₁	淡黄褐色	(18.0)	-	(5.2)	端面内外面に肥厚。頸部途中で屈曲する。	外面ハケ(7本/cm)整形ののちヨコナデ。強いヨコナデのため頸部凹凸あり。	
5	壺B ₁	淡黄褐色	(15.2)	-	(5.5)		頸部に凹線文。外面タテ方向のハケ整形。	
6	壺A ₁	淡黄褐色	(19.2)	-	(4.3)	やや大型で頸部長い。	口縁部ヨコナデ。	
7	壺B ₁	淡褐色	(15.0)	-	(4.9)	頸部内面立ち上り気味に肥厚。直口する頸部から水平気味に口縁部屈曲。	内面ユビ整形。外面ヘラミガキ。口縁部ヨコナデ。	
8	壺B ₁	淡黄褐色	(10.0)	-	(7.7)	短い口頸部。途中で屈曲する。内外面に肥厚させた口唇面に刻目文ののち円形浮文を付加。	外面ハケ整形。内面ユビ整形・仕上げ。口縁部ヨコナデ。	
9	壺A ₁	淡黄褐色	(12.0)	-	(15.6)	端面外面のみ下方に肥厚。短い口頸部に球状の胴部。	外面ハケ整形。内面ユビ整形。胴部に列点文施す。	
10	壺	淡黄褐色	-	-	(15.2)	胴部下半で最大腹径部は残存。緩やかな稜を持つ。	粘土経明瞭。胴部下半に刺突文巡る。	
11	壺B ₁	淡褐色	(25.0)	-	(6.6)	直立気味の頸部から屈曲して内外面に肥厚した頸部へ続く。	外面ハケ整形。口縁部ヨコナデ。	
12	壺B ₂	淡黄褐色	(19.0)	-	(5.4)	緩やかな曲線を描いて口縁端部となる。頸部短い。	外面ハケ整形後頸部に指圧痕の付いた突帯。端面には6本単位の棒状浮文。	
13	壺B ₂	暗黄褐色	(17.0)	-	(6.6)	緩やかに外反する口縁部。	外面ハケ整形。口縁部のみヨコナデ。	
14	壺B ₂	淡黄褐色	(23.0)	-	(5.2)	緩やかに大きく外反する。	頸部に凹線文。口縁部・内面ヨコナデ。	
15	壺B ₂	黄褐色	(27.0)	-	(5.8)	大きく外反する。	外面ハケ整形。口縁部との接合はユビ整形。端面のみヨコナデ。	
16	壺A ₂	淡黄褐色	(27.0)	-	(3.6)	外反し、水平に近く口縁開く。	内面に3条の突帯。端面内側に波状文を巡らし、その上に円形浮文付加する。口唇面も刺突文ののち4割単位の円形浮文を付ける。口唇面と内面の円形浮文は同じ位置に付けている。	
17	壺A ₂	淡黄褐色	(27.0)	-	(3.8)	緩やかに外反し、口縁端面は幅広く稜線を持たない。	内面に突帯1条。頸部に凹線文。	
18	壺B ₂	淡黄褐色	(24.0)	-	(6.5)	直立気味の頸部から屈曲して口縁部へ続く。突帯は高い。	外面ハケ整形。内面・口縁部ヨコナデ。内面突帯ならびに口縁端部に刻目文。頸部に指圧痕を付けた突帯を巡らす。	

No	器種	色調	法量 (cm)	口径	底径	器高	形態	技法	備考
19	壺A ₂	砂淡黄色-淡褐色 (内面) 淡黄褐色	18.6	8.4	32.9- 32.5		やや肩の張った球形の胴部に直線的に外反する口縁部をつける。端部は水平に開きやや垂下する。	内外面ともユビ整形。外面はその後へラミガキをし、刺突文・円形浮文(3個単位)を付ける。内面2条の突帯は刻目文を有し突帯間に2個1対の小孔を4ヶ所に持つ。端面は刺突文ののち3個単位の円形浮文を有する。	
20	壺C ₁	淡黄褐色	-	-	(8.7)		内彎気味に直立する口縁部で端部は内面に肥厚。頸部は稜線を持たず緩やかに胴部へと広がる。	ヨコナデで仕上げている。口縁外面は刻目文を巡らし、頸部は指圧痕のついた突帯を持つ。外面は全体に凹線を施す。	
21	壺C ₂	淡黄褐色	-	(17.4)	(7.1)		頸部緩やかで内彎気味に直立する。端部内面に水平に肥厚する。	ヨコナデで仕上げ。端部下に2条、頸部に1条の突帯。	
22	壺C ₁	淡黄褐色	(20.4)	-	(7.2)		直線的にやや外開きな口縁部。	口縁部上半のみ4条の凹線文。頸部に突帯あり。ヨコナデで仕上げ。	
23	壺C ₂	淡黄褐色	(18.2)	-	(8.9)		直線的に外反し、口縁端部付近で内彎し、端部は丸くおさめる。	ヨコナデ仕上げ。頸部に指圧痕のある突帯を持つ。口縁外面は全体に凹線文を施す。	
24	壺	淡黄褐色	-	-	(3.9)		頸部部分のみの破片。	強いヨコナデで、棒状浮文を添加する。	
25	壺	淡黄褐色	-	-	(9.2)		緩やかに外反する。	内面ユビ調整。外面ヨコナデ。頸部に指圧痕を持つ突帯を付ける。口縁部下半に11条の凹線文。	
26	壺D	砂淡褐色-黒灰色 (内面) 淡黄褐色	(26.0)	-	(4.0)		大きく垂下する口縁端部。水平に内側に伸び、彎曲する頸部になると思われる。	ヨコナデ仕上げ。端面は全体に5条の凹線文。	
27	壺E	淡黄褐色	(30.4)	-	(4.3)		外反し、口縁端部下で内傾させ丸くおさめた端部を持つ。	ヨコナデ。外反部分のみ凹線文を施す。	
28	壺E	砂淡黄褐色 (内面) 淡黄褐色-黒色	(26.0)	-	(7.2)		直線的に外反し、稜線を持って内傾させ、端部は上方へつまみ上げる。	稜線下に刻目文を施した5条の突帯を付け3個単位の棒状浮文を付加する。稜線の上は5条の凹線を施し、刺突文ののち小さい2段の円形浮文(3組2段単位)を付ける。	黒炭あり
29	壺	砂淡黄褐色 (内面) 淡黄褐色-黒灰色	-	(7.4)	(3.5)			底面・内面はユビ仕上げ。外面はへラミガキ。	
30	壺	砂淡褐色-黒灰色 (内面) 淡黄褐色	-	(9.6)	(3.1)			底面はナデ仕上げ。外面は文様を意識したのではないかと思われる不定方向のハケ整形。	黒炭あり。
31	壺	淡黄褐色	-	10.0	(3.8)			底面・内面はユビ調整。外面へラミガキ。	
32	壺	淡黄褐色	-	(10.9)	(5.8)			底面ユビ調整。外面粗いへラミガキ。	
33	壺	淡黄褐色	-	(8.2)	(3.7)			磨減しているため不明だが、全体にユビ仕上げと思われる。	
34	壺	淡黄褐色	-	(9.0)	(3.3)			内面ハケ整形。外面・底面ユビ仕上げ。	
35	壺	淡黄褐色	-	(8.6)	(5.5)			全体にユビ整形・仕上げ。	

No	器種	色 調	法 量 (cm)		形 態	技 法	備 考
			口径	底径 器高			
36	壺	粉淡黄褐色～黒灰色 ㊦㊧㊨ 淡黄褐色	-	(8.2) (4.4)		底面に粘土付け足している。	黒底あり
37	壺	淡黄褐色	-	(10.4) (4.4)		底面・内面ユビ調整。外面ヘラミガキ。	
38	壺	㊦㊧㊨ 淡黄褐色 粉黒色	-	8.0 (2.6)	表面磨減しており、接線磨減している。	全体にユビ調整。	
39	壺	㊦㊧㊨ 淡黄褐色 粉淡黄褐色～暗灰色	-	(11.0) (4.0)		磨減のため不明。	
40	壺	粉淡黄褐色 ㊦㊧㊨ 淡黄褐色～黒灰色	-	(9.6) (5.6)		ナデ調整。	
41	壺	淡黄褐色	-	(6.8) (12.9)	僅かに上げ底になり緩やかに外反し接線を持たずに彎曲し、内向する。	底部ユビ仕上げ。外面タタキ整形のちユビ仕上げをする。最大腹径上部に列点文。内面もユビ整形仕上げ。	
42	甕A ₁	淡黄褐色	(13.0)	5.2 27.0	平底から外反して最大腹径を全体の3分の2のところ有して内彎して頸部に至り、激しく屈曲して狭い口縁部を付ける。肩部は角張り気味である。	口縁部のみヨコナデ、内面ユビ整形・調整。外面はハケ整形のちユビ調整。	
43	甕A ₂	淡黄褐色～暗灰色	(15.2)	- (3.2)	頸部緩やかに屈曲し、内面に接を持たない。口縁端部内面は上方につまみ上げている。	ヨコナデ仕上げ。	黒底あり
44	甕A ₃	淡黄褐色	(15.4)	- (5.5)	頸部内面僅かに接を持つ。胴部は直線的に伸びる。口縁部は全体的に上方へつまみ上げ丸くおさめている。	ヨコナデ仕上げ。特に頸部は強いヨコナデ。外面はハケ整形。内面もハケ整形のちユビ調整が行われている。	
45	甕A ₄	淡黄褐色	(20.6)	- (4.0)	内面に僅かに接を持つ。肩部は全体的につまみ上げている。	ヨコナデ仕上げ。	
46	甕A ₅	㊦㊧㊨ 淡黄褐色 粉淡黄褐色～黒灰色	(23.2)	- (3.7)	頸部強く屈曲し、明らかに接を持つ。肩部全体的につまみ上げている。	ヨコナデ仕上げ。	
47	甕A ₆	淡橙褐色	(22.1)	- (2.9)	頸部内面緩やかな弧を描き接を持たない。肩部全体的に上方へつまみ上げる。	外面ハケ整形。ヨコナデ仕上げ。	
48	甕B ₁	淡黄褐色	(24.1)	- (4.4)	内面に接を持つ。器壁厚い。口縁端部内外面に肥厚している。	ヨコナデ仕上げ。	
49	甕A ₁	淡黄褐色	(17.0)	- (2.5)	胴部から口縁部に内面は直線的にくの字形になるが、外面は弧を描く。	ヨコナデ仕上げ。	
50	甕A ₁	淡黄褐色	(16.0)	- (3.8)	胴部内彎気味に広がっている。頸部内面僅かな接を持つ。肩部は丸くおさめている。	外面ハケ整形。内面はハケ整形のちユビ調整。口縁部はヨコナデ。	
51	甕B ₂	淡黄褐色	(23.2)	- (13.6)	胴部内彎気味の丸い形態。肩部は内面を上方へつまみ上げ、端面に凹線を描す。	口縁部ヨコナデ仕上げ。	
52	甕B ₂	淡黄褐色	(17.6)	- (4.3)	短い胴部で口縁端部は全体に内側上方へ斜め方向につまみ上げられている。端面に凹線文を施し円形浮上を施文。	ヨコナデ。	

No	器種	色調	法 口径	量 底径	(cm) 器高	形 態	技 法	備 考
53	甕B ₂	淡黄褐色	(14.0)	-	(5.1)	内面に稜を持ち、短い頸部。口縁部は内外面に肥厚している。端面に3条の凹線文。	ヨコナデ。	
54	甕B ₂	◎淡黄褐色-淡紫褐色 ◎淡黄褐色 ◎暗褐色	(14.0)	-	(4.0)	内唇気味の胴部で口縁部は直立に近く立ち上がる。断面ハナ形で端面が最も厚い。刺突文のうち円形浮文を付加。	ヨコナデ。	
55	甕A ₁	◎淡黄褐色-黒灰色 ◎淡黄褐色	(20.4)	-	(5.0)	内面に稜を持つ、くの字形の口頸部で端部は角張る。胴部内唇気味。	ヨコナデ。	
56	甕A ₁	暗黄褐色	(42.8)	-	(7.8)	大型の器形で胴部は直線的。頸部は緩やかに屈曲し、内面は直線的で外面は外反気味になる。頸部が厚く角張り気味に丸くおさめる。	ヨコナデ。	
57	甕A ₂	淡黄褐色	(33.4)	-	(4.3)	緩やかな頸部で口縁端部内面を内側上方へつまみ上げている。	内面ナデ(板ナデ?)調整。口縁部ヨコナデ。	
58	甕B ₁	淡黄褐色	(29.0)	-	(5.7)	胴部直線的で、くの字形の口頸部で、端部内外面へ肥厚する。	内外面ともハケ整形。口縁部ヨコナデ。	
59	甕A ₁	◎先玉◎淡黄褐色 ◎淡褐色-暗灰色	-	-	-	粗製の土器で特殊なタイプ。直立気味に内唇し、短い口縁部が付く。頸部角張る。	ナデ整形・仕上げ。	
60	甕A ₁	淡黄褐色	(26.2)	-	(12.8)	内唇気味の丸い胴部。口縁部は直線的で端部角張る。頸部が最も薄い。	ヨコナデ。	
61	甕	◎先玉◎淡黄褐色 ◎淡黄褐色-暗褐色	-	(6.2)	(3.8)		内外面ともハケ整形。底面ナデ調整。	
62	甕	淡黄褐色-暗黄褐色	-	(7.6)	(4.3)		底面ナデ調整。	
63	甕	◎先玉◎淡黄褐色-淡赤褐色 ◎淡黄褐色	-	(6.0)	(2.7)	僅かに上げ底になる。器壁薄い。底部端部外方へ張り出し、直立状に胴部へ続く。	外面に指圧痕見られ、底部ユビ整形したものと思われる。底面・内面もユビ調整。	
64	甕	◎先玉◎淡黄褐色-黄褐色 ◎淡黄褐色	-	5.2	(2.8)		外面ヘラミガキ?。	
65	甕	◎淡黄褐色-淡紫褐色 ◎先玉◎淡黄褐色-黒灰色	-	3.2	(2.5)	器壁薄い。やや外反気味に伸びる。	底面ナデ仕上げ、外面ハケ整形。	
66	甕	淡黄褐色	-	(8.8)	(3.8)	外反気味に胴部へ伸びる。	内面・底面ナデ仕上げ。外面粗いヘラミガキ?(調整)。	
67	甕	◎先玉◎淡黄褐色 ◎淡黄褐色-黒灰色	-	(9.6)	(4.2)		内面・底面ナデ仕上げ。外面粗いヘラミガキ。	
68	甕	◎淡黄褐色-赤褐色 ◎先玉◎淡黄褐色	-	(6.8)	(4.5)	直線的に外へ広がる。	内面・底面ナデ仕上げ。外面粗いヘラミガキ。	
69	甕	◎淡黄褐色-淡赤褐色 ◎先玉◎淡黄褐色-黒灰色	-	(5.6)	(2.9)	中央ずれた位置に焼成前穿孔。	胴部・底部の境界、指圧痕。内面外反気味に胴部へつながる。	
70	甕	淡黄褐色	-	6.6	(4.1)	直線的に外反する。焼成前穿孔。	内面・底面ナデ仕上げ。	
71	甕	淡黄褐色	-	(5.0)	(4.3)	焼成前穿孔。		
72	甕	淡黄褐色	-	6.9	-	底面端部外方へ張り出している。焼成前に内外面から穿孔。	全体的にユビ調整。	

No.	器種	色 調	法 量 (cm)			形 態	技 法	備 考
			口径	底径	器高			
73	鉢	淡黄褐色	(33.4)	—	(2.5)	口縁端部内外面へ肥厚している。	口縁部下に割目文の施された突帯2条残っている。ヨコナデ仕上げ。	
74	鉢 (楕形)	淡黄褐色	(30.8)	—	(4.1)	端部内外面に肥厚する。端部から直立し突帯部分から内側へ内脚気味に伸びる。	ヨコナデ。	
75	鉢	(五五) 淡黄褐色 ◎淡黄褐—黒灰色	(30.8)	—	(8.0)	端部水平で端部内外面へ大きく肥厚している。口縁部が最大径で内脚する体部へ続く。	ヨコナデ。	
76	鉢 (楕形)	淡黄褐色	(15.0)	—	(4.3)	杯部内脚しつつ、稜線を持たずに端部へ続く。	ヨコナデ仕上げ。3条の凹線文。	
77	鉢 (楕形)	◎淡黄褐—黒灰色 (五五) 淡黄褐色	(18.2)	—	(3.6)	緩やかな曲線を描く。端部外面に肥厚。	ヨコナデ。凹線文を3条施し、高い部分に口縁端部も含めて3帯に割目文施す。	
78	鉢	淡黄褐色	(26.6)	—	(5.1)	端部外面大きく斜め下方へ肥厚させている。内脚する体部へ続く。口径が最大径となる。	ヨコナデ。	
79	鉢 (楕形)	◎黒色 ◎淡黄褐色 ◎黒—淡黄褐色	(17.0)	—	(3.8)	口縁部内傾している。端部内面に肥厚。	外面5条以上の凹線文。ヨコナデ仕上げ。	黒斑あり。
80	鉢 (楕形)	◎黄灰色 ◎茶褐色	—	—	—	内脚気味に開く体部で稜を持たずに上方へ立ち上がる。端部内外面に肥厚している。内面は大きく内側上方につまみ上げている。	内面へフミガキ。肩部・外面ヨコナデ。外面3条の凹線文。	
81	鉢 (楕形)	黄灰—黄褐色	(21.6)	—	(3.2)	口縁端部付近のみ内傾している。内面の曲線の方が急である。端部内外面に肥厚している。	外面4条以上の凹線文。ヨコナデ。	
82	鉢 (楕形)	淡黄褐色	(28.5)	—	(6.0)	緩やかに稜を持たずに立ち上がる。端部内外面に肥厚。	外面に3条の凹線文。ヨコナデ仕上げ。	
83	脚台	(三五) 淡黄褐色 ◎赤褐—黒—赤褐色 (ヤンドイッチ状)	—	(30.4)	(6.2)	内脚気味に緩やかに外に開く。裾端部内外面に肥厚している。	内面に体部の接合面の割離が見られる。筒部の細いところに2条の突帯があり、裾部と突帯の間に円形透孔列が通っている。端部と外面ヨコナデ。	
84	脚台	(三五) 淡黄褐色 ◎赤褐色	—	(30.4)	(3.4)	くの字形の形態で直線的に伸びる。内面に明らかな稜を持ち、端部は外面が斜上方につまみ上げられている。	裾端部周辺のみヨコナデ。体部との割離痕あり。	
85	ジョッキ 形土器	◎淡黄褐色 (三五) 淡黄褐— 淡褐色	—	(14.4)	(13.9)	瓶形に近いが、下方に最小部分がある。	底部は欠失しており、接合面見られる。把手体部整形後付けている。内外面ともハケ(3~4本/cm)整形。底部下に二段の三角形透孔列を巡らす。三角形は頂点を向い合わせている。	
86	高杯	淡黄褐—赤褐色	(28.8)	—	(4.5)	緩やかに上方に内脚する。杯部比較的浅い。口縁部斜下方に伸び、稜を持ってさらに斜め下方に垂下しますが、垂直ではない。内面の突帯端部は角張り気味である。		

No	器種	色 調	法 量 (cm)			形 態	技 法	備 考
			口径	底径	器高			
87	高杯	淡黄褐色	(21.4)	-	(3.0)	浅い杯部から角張り気味の幅広い実帯を付け斜め下方に口縁部伸びており、肩部上下に肥厚する。端面は平坦ではなく丸味をおびている。	ヨコナデ。端面に3条の凹線文のうち6本単位の棒状浮文。	
88	高杯	淡黄褐色	-	-	(10.4)	高杯杯部で緩やかに。	杯部との接合面明らか。円板が欠失したものと思われる。内面に紋目。外面ヘラミガキ。	
89	高杯	<先> 淡黄褐色 ◎淡黄褐色 ～帯状～淡黄褐色 {サンドイッチ状}	-	-	(6.1)	緩やかに杯・裾部へ広がる。	円板部残っている。内面紋目。	
90	脚台	淡黄褐色	-	(2.2)	(3.4)	端部内外面に肥厚。	ヨコナデ。	
91	脚台	淡黄褐色	-	(6.2)	(5.2)	外反し、端部角張る。		
92	脚台	暗黄褐色	-	(11.6)	(4.0)	端部外面上方に肥厚する。	端部周辺ヨコナデ。端面下部近くに凹線文。	
93	脚台	淡黄褐色	-	(10.8)	(3.7)	端部外面	端部周辺ヨコナデ。	
94	脚台	淡黄褐色	-	(14.8)	(6.9)	裾部中央付近で緩いS字状にカーブし、端部内面へ肥厚する。	端部周辺ヨコナデ。端面に2条の凹線。	
95	脚台	淡黄褐色	-	(14.8)	(4.5)	低い脚台になる。外反し、端部外面肥厚する。	内面ヘラケズリ。外面・端部ヨコナデ。ヘラ描き沈線2条施されている。	
96	脚台	<先> 淡黄褐色 ◎淡黄褐色	-	(10.6)	(4.3)	直線的に外方へ延び、端部内外面に肥厚する。内面稜を持つ。	外面ハケ整形。端部周辺ヨコナデ。	
97	脚台	淡黄褐色	-	(10.2)	(4.2)	直線的に延び、内外面へ大きく肥厚する。	端部周辺ヨコナデ。他はエビ調整。	
98	脚台	淡黄褐色	-	10.6	(6.4)	筒部垂直的になり、外反して端部へ続く。端部内外面へ肥厚し、端面中央凹んでいる。内面稜を持つ。	端部周辺ヨコナデ。他はエビ調整。残存部端、粘土の接合面。	
99	脚台	淡黄褐色	-	(11.4)	(4.7)	外反し、端部内外面に肥厚する。	端部周辺ヨコナデ。3条の直線文。	
100	脚台	淡黄褐色	-	(13.8)	(2.5)	端部内外面に大きく肥厚する。端面中央凹んでいる。	端部周辺ヨコナデ。	
101	脚台	淡黄褐色	-	(16.2)	(3.5)	直線的に延び、外面上方に大きくつまみ上げる。	外面・端部ヨコナデ。	
102	脚台	淡黄褐色	-	(15.8)	(5.5)	筒部垂直的になり途中から外反し、端部内外面に肥厚する。特に外面は大きく肥厚する。	端部周辺ヨコナデ。	
103	脚台	<先> 淡黄褐色 ◎淡黄褐色 ～帯状～淡黄褐色 {サンドイッチ状}	-	(16.4)	(2.7)	直線的に延び、端部内外面に肥厚する。特に外面は大きく肥厚。		
104	脚台	淡黄褐色	-	(15.8)	(3.2)	緩やかに外反し、端部内外面肥厚する。	裾部はヨコナデ。外面に2条の凹線文。	
105	脚台	◎帯状色 <先> 淡黄褐色	-	(26.2)	(5.0)	直線的で端部角張る。	3条以上の凹線文。端部・外面ヨコナデ。	

No	器種	色 調	法 量 (cm)		形 態	技 法	備 考	
			口径	底径				
105	脚台	淡黄褐色	-	(12.4)	(3.8)	緩やかに外反し、端部内外面に僅かに肥厚する。端面中央凹入している。	全体的にヨコナデ。特に端部は強いヨコナデ。外面に5条1単位の直線文帯が2組ある。	
107	脚台	淡黄褐色	-	(16.6)	(6.5)	直線的に延びる。端部隅を取った角形になる。	端部周辺ヨコナデ。端部上部に三角形の刺突文。その上に6条の直線文を施す。	
108	壺	淡黄褐色	-	(5.8)	(3.6)		2条の突帯。外面ヨコナデ。	磨滅しているが、小型壺類部？
109	不明	(5.8) 淡黄-黒褐色 淡褐色	(8.0)	(4.6)		上げ底状の底部。底部端丸くおさめており、残存部残生きている可能性がある。	底面ユビ整形。	把手部かもしれない。

(2) 石器

石鏃 [(1)・(2)]

(1) サヌカイト製。形態は平基無茎式である。表面は、調整が細かく施されている。裏面は、素材剥片の剥離面を大きく残し、周縁に調整が施されている。風化のため剥離の順序を十分に観察することができない。

(2) サヌカイト製。形態は凹基無茎式である。表面は比較的調整が細かく施されているが、裏面は調整が粗い。風化のため、観察が困難である。

スクレイパー [(3)~(6)]

(3)はサヌカイトの、やや幅広く薄手の剥片を素材とする。素材剥片の表面は、調整が粗い。裏面は、素材剥片の剥離面を大きく残す。打面部には、打面調整が2面施されている。刃部には、細かな調整が施されている。

(4)~(6)も、サヌカイト製である。

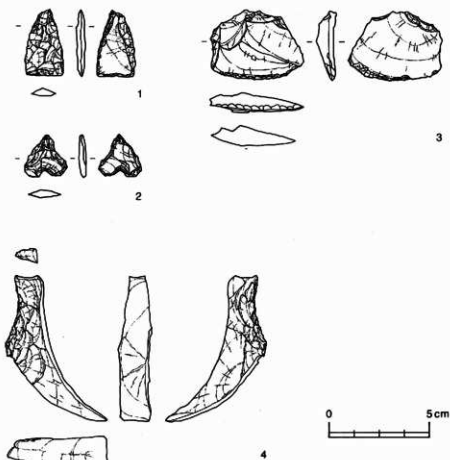
(4)は、大型の整った横長剥片を素材とする。打面部側の縁部の両面に調整加工を加えて刃部を作出している。打点の周辺のみを未調整で残す。打面は平坦な自然面である。両端は折断面となっている。

(5)は、長・幅のほぼ等しい厚手の剥片の一方の側縁及び下縁に両面から調整加工を施し、刃部を形成する。他方の側縁と打面は折断面である。

(6)は、一端を折損する横長剥片を素材とする。下縁のほぼ全体に浅く不連続な調整加工を加えて刃部を形成している。裏面のほぼ全体に受熱した安山岩に特有の網状のヒビが観察される。

楔形石器 [(7)]

(7)は、大型のサヌカイト製横長剥片を素材とする。両面の上縁と表面の下縁に著しい階段状剥離の集中を残す。両側縁は折断面となっており、本来は現状の約2倍ほどあったと考えられる。

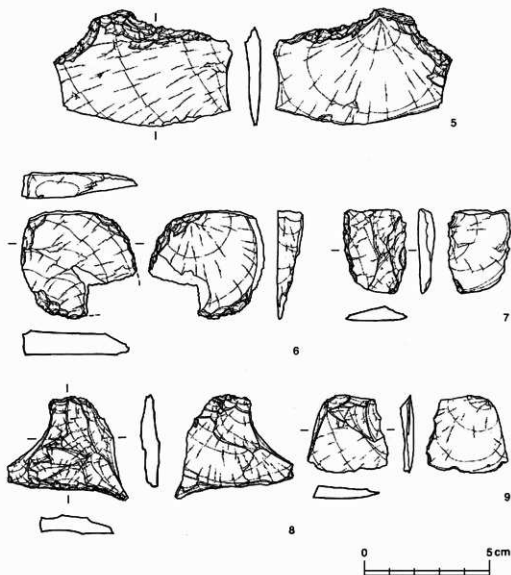


第49図 石器実測図(1)

楔形石器碎片 [(4)]

楔形石器の使用によって生じる碎片であり、一般には削片（スポール）と呼ばれる資料である。この碎片が生じた楔形石器本体は、平盤な大型の削片を素材としたものであったと推定される。サヌカイトを用いる。一辺の両面に使用時の衝撃による著しい階段状剥離が認められる。他の3面は、いずれも載断面等によって構成される。図の上と下に示した2面は、共に同一方向からの加撃によって生じた載断面である。中央に図示した面は、楔形石器本体のほぼ中央からの力によって折断面状となっている。但し、この面は、他の剥離面や載断面との切り合い等の関係から、その剥離方向や形成要因については疑問が残る。3号墳の封土中より出土している。

加工痕有削片 [(9)]

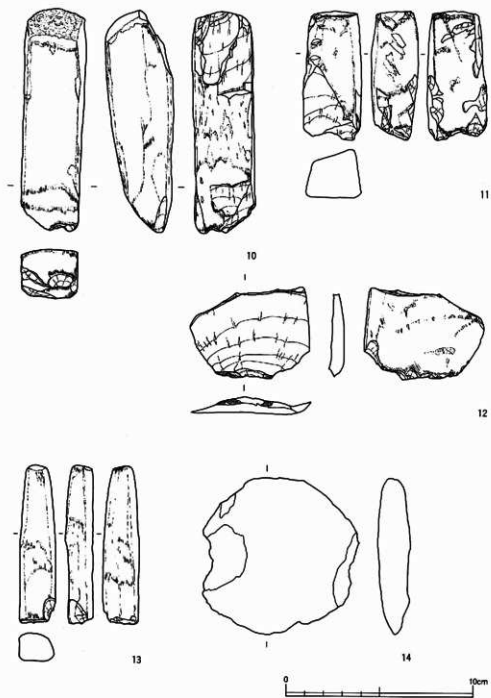


第50図 石器実測図(2)

(9)は、長・幅のほぼ等しいサヌカイト製の薄手の剥片を用いる。表面左側縁に極めて浅く弱い剥離痕が認められる。側縁の全体に及ぶが、これを刃部とするには角度や深さなどの安定度を欠くところから、加工痕有剥片として捉えておきたい。下縁の全体に使用痕がみられる。

磨製石斧 (10・11・12)

(10) 片岩製。完形品である。基端は少し丸味をもち、やや左上がりの斜基になっており敲打



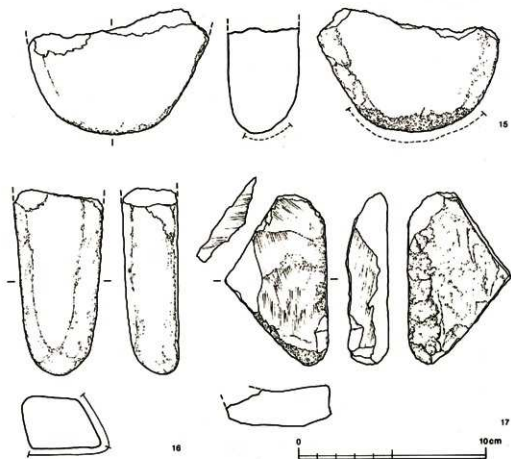
第51图 石器实测图(3)

痕が見られる。これは、柄として取り付けられた木との接触によって生じたものと考えられる。表面には、上部に着柄痕がある。表面の基端は大きく欠損している。両面ともに非常に丁寧に研磨が施されているが、表面はやや粗い。両面ともに研磨方向は、傾斜に平行な直線状となっている。側面には、一部粗い研磨が観察できる他は、丁寧に研磨である。尚、裏面には、加撃の際、生じたと考えられる使用痕が観察できる。

01 泥岩製。刃部を大きく、その他数ヶ所を欠損している。基端は平基である。研磨方向は、両面ともに、やや左上がりの直線状である。着柄痕と考えられる箇所が、表面の基端から5分の2までの部分に観察できる。

04、05共に柱状片刃石斧である。

02 頁岩製。扁平片刃石斧の刃部の破片と考えられる。表面には、非常に丁寧に研磨が施されており、表面の刃部と考えられる箇所にはわずかに研磨の痕がみられる。この破片を観察する



第52図 石器実測図(4)

と、刃部角は70度から、80度の間である。

砥石 (03・07)

03は砂岩製。下部を一部欠損している。研磨方向の観察は困難であるが、全面で研磨部位が5ヶ所みられる。研磨対象物は、金属器が推定される。

04は三角形の平面形をなすきめの細かい砂岩を素材とする。正面及び側面の2面には使用による明瞭な線状痕が観察される。裏面は剥落が進んでおり、使用面となっていたか判断し得ない。

礫石錘 (04)

安山岩を素材として使用している。扁平な円礫を素材とし、両端から、1、2回加撃している。

第6表 石器観察表

No.	器 種	材 質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備 考
1	石 鏃	サヌカイト	2.6	1.65	0.3	1.35	平基無茎式
2	石 鏃	サヌカイト	1.7	1.7	0.3	0.85	凹基無茎式
3	スクレイパー	サヌカイト	2.7	3.7	0.8	7.00	
4	楔形石器碎片	サヌカイト	5.8	2.8	2.2	14.6	
5	スクレイパー	サヌカイト	4.4	6.9	0.55	23.4	
6	スクレイパー	サヌカイト	4.3	(4.6)	1.0	(20.8)	
7	スクレイパー	サヌカイト	3.8	2.7	0.4	5.40	
8	楔形石器	サヌカイト	3.6	4.5	0.6	14.6	
9	加工痕有剥片	サヌカイト	3.5	3.4	0.5	4.90	
10	磨製石斧	片 岩	11.6	4.4	2.5	245.7	柱状片刃
11	磨製石斧	泥 岩	(6.8)	3.1	2.5	(78.70)	柱状片刃・刃部欠
12	磨製石斧	頁 岩	(4.8)	(6.3)	(0.8)	(39.95)	刃部破片
13	砥 石	砂 岩	8.1	1.9	1.4	34.65	
14	礫 石 錘	安 山 岩	8.2	8.2	1.7	144.2	
15	敵 石	花 崗 岩	(9.3)	(5.5)	(3.7)	235.0	
16	磨 石	花 崗 岩	(9.5)	(4.7)	(3.0)	290.0	
17	砥 石	砂 岩	9.0	5.4	2.2	140.0	

()付きは破損品

敲石 (I4)

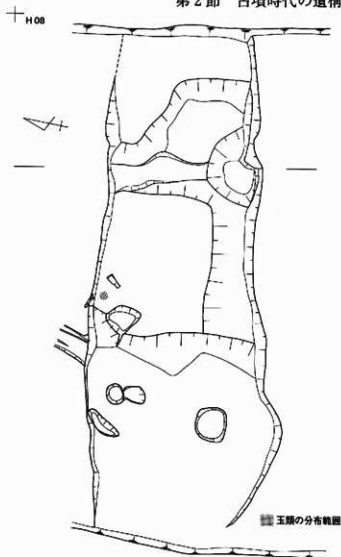
花崗岩の楕円礫を素材とし、約2分の1を欠失する。残存する一端には使用による敲打痕を残す。磨面は観察されない。

磨石 (I4)

花崗岩の楕円礫を素材とし、約3分の1を欠失する。断面はゆがんだ平行四辺形を呈し、その下面と一方の側面を使用面とする。

以上のように、籠子向イ山遺跡の石器は、石鏃・スクレイパーなどの剥片石器類と、磨製石斧類に分けられる。石鏃・スクレイパー類は、素材剥片の確保及び調整の点で、非常に粗雑である。石鏃は周縁部に調整を施すのみであり、スクレイパーも、細かな調整は刃部のみに留まる。一方、磨製石斧類は、安定した形態のものが依然使用されている。こうした点は弥生時代中期後半の本地域における石器製作技術伝統の終末の様相を表すものといえよう。

第2節 古墳時代の遺構



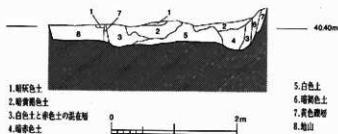
玉類の分布軌跡

1. 遺構

龍子向い山遺跡からは主として弥生時代の集落跡を検出したが、古墳時代に属する遺構も検出しており、溝状遺構と方形の土塼を調査した。溝状遺構は、龍子向い山3号墳の上方で検出された遺構で、全長6.6m、幅2.3~2.8mを測る。東西方向に長く延びているが、等高線を斜めによぎっているため、溝の南側壁を深く、北側壁を浅く掘り込んでいる。地山を掘り込んでいるが、斜面の上方では深く、下方に行くに従って浅くなっている。溝の底は平坦ではなく、両側壁に近い部分が深く、中央付近が盛り上がっている。

土層堆積は、下層に赤色土と白色土、中層に暗黄褐色土、上層に暗灰色土が見られる。この暗灰色土は斜面上方では2条の溝を形作っているが、下方では1条である。この上面から鉄斧等の鉄製品や玉類が出土している。

溝の底から3基の土塼を



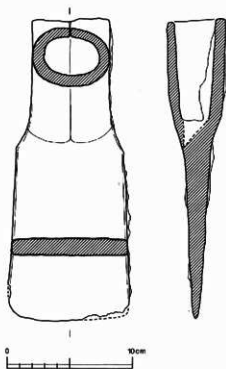
第53図 溝状遺構実測図



第54図 溝状遺構遺物出土状態図

検出した。1基は、平面形が直径55cmの円形で、ほぼ垂直に掘り込んでいる。1基は平面形が40×45cmの不整形をしており、底にいくにしたがって狭くなっている。この2基は赤色土が堆積していた。他の1基は平面形が直径35cmの円形で黒色土の堆積が見られた。

方形土壌は、溝状遺構の北隣で検出された土壌である。後世に削平を受けているが、平面形は一边70cm程度の方形であったと推定される。深さは約30cmを測る。この方形の土壌の南西隅、つまり斜面に対して最も低く、溝状遺構に近い部分から、溝状遺構から出土したのと同じガラス製小玉が4個出土した。この玉が、原位置を保っているかどうかは不明である。出土した部分が削平を受けているため、同様な玉が他にも存在した可能性があろう。この土壌からはガラス製小玉以外の遺物は出土していない。



第55図 溝状遺構出土 鉄斧実測図

2. 遺物出土状態

溝状遺構から、遺物は鉄斧・鉄剣・鉄製刀子各1点及び玉類がまとまって出土している。鉄斧は斜面中央部付近の北壁近くから、刃部を北に向けて等高線に平行するような状態で出土した。鉄剣は鉄斧の北西側の斜面下方から、鋒を斜面の下方向に向け、鉄斧に直交するような状態で出土した。鉄製刀子は4片に分かれて出土している。1片は鉄剣の隣で、他の3片は鉄剣の南側で出土している。刀子片と鉄斧・鉄剣とは「コ」の字形に並んでいる。この鉄斧・鉄剣と鉄製刀子片で囲まれた中央部で、ガラス製玉類が総数38点出土した。

3. 出土遺物

鉄斧(第55図)

鉄斧は、袋部を持つ有肩式の鍛造品である。全長23.5cm・刃部長14cm・幅9.5cm・厚さ



第56図 溝状遺構出土
鉄剣実測図

1cm・袋部は長さ9.5cmで、外法が4.5×6.5cmの楕円形をしている。X線撮影により袋部の合わせ目がはっきりと認められた。錆ているものの遺存状態は良好である。重量は1668g（処理後）を量る。

鉄剣(第56図)

鋒および茎は欠損しているが、一方の関は遺存している。残存長24cmを測る。茎の長さは不明であるが、鋒を復元すると鋒から茎までの長さは25cm程度と考えられ、全長は28cm以上と推定される。刃部幅は3～3.5cmの両丸造りで、厚さ0.5～0.7cmを測る。錆は錆のため明瞭に認められない。

鉄製刀子(第57図)

4片に分かれて出土している。1片は鉄剣際から、他の3片は鉄剣の南側30cmの部分から出土している。鋒の破片のみ接合しない。全長は約14.5cm・刃部の長さ8cm・茎の長さ6.5cm・幅1cm・厚さ0.3cmを測る。関は不明であるが、片関造りであろう。平楯造りである。

玉類(1～43)

溝状遺構から38点、方形土壙から4点、総数42個が出土しているが、管玉は(43)1点のみである。全長2cmで中央部が膨らみ、両端に行くに従って細くなっている。最大幅は0.7cm、両端の幅は0.5cmを測る。色は不透明な緑灰色をしている。材質はガラスである。

残りの41点はガラス製の小玉である。色は細く見ると1点1点異なっているが、基本的には全て透明あるいは不透明な紺色をしている。大きく2つの形態に分けられる。1つは円い管を軸に対して直角に切断したような形をしており、玉の両端が平面的なものである。もう1つは全体的に不整形で孔を開けている部分も丸みを帯びたものである。両者とも大きさは全長0.5cmから1cm程度のものである。形態の違いは製作方法による差であるかも知れない。

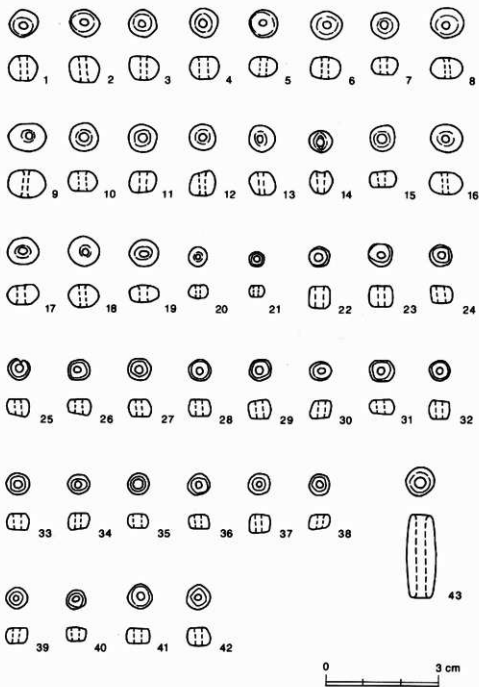
溝状遺構から出土した玉の管玉・小玉合わせて38点という数が本来のものであると仮定すると、以上の玉は腕輪に使用されていたものと考えられる。



第57図 溝状遺構出土刀子実測図

4. 小結

本節で「溝状遺構」としたものは、概報では「祭祀遺構」として掲載している遺構である。本報告書を作るにあたり、再度遺構・遺物の整理を行ったところ、「祭祀



第58圖 溝状遺構・方形土壇出土 玉類実測図

第7表 出土玉類計測表

No.	径(mm)	厚(mm)	孔径(mm)	重量(g)
1	7.8×7.45	6.75	2.4×1.9	0.5
2	7.8×7.05	6.45	2.4	0.5
3	7.7×7.2	5.95	1.8	0.5
4	7.6×7.5	5.75	2.5×2.05	0.45
5	7.45×7.15	4.5	1.9×1.5	0.35
6	7.95×7.05	5.4	2.15	0.45
7	7.25×6.85	4.6	2.0	0.3
8	8.15×8.05	5.65	1.55	0.5
9	9.7×7.25	5.7	1.5	0.7
10	7.45×7.2	5.5	2.05	0.4
11	7.5×7.05	5.6	1.9	0.4
12	6.75×6.7	6.2	1.7	0.4
13	6.85×6.4	6.35	2.2	0.4
14	6.1×5.8	5.75	2.1	0.2
15	6.95×6.05	(4.4)	2.0	0.25
16	8.5×7.15	5.75	1.7	0.5
17	8.3×7.6	5.6	2.1	0.4
18	8.4×7.7	6.0	1.7	0.5
19	8.0×7.15	4.55	2.5×1.6	0.35
20	5.3×5.1	3.5	1.5	0.1
21	4.3×4.05	3.3	1.7	0.1
22	5.95×5.6	5.95	2.7	0.2
23	6.7×6.5	5.85	2.5	0.35
24	5.9×5.75	4.5	2.25	0.2
25	5.7×5.6	4.75	2.05	0.15
26	6.1×5.4	4.15	2.5×2.0	0.2
27	5.95×5.75	4.45	2.25	0.2
28	5.7×5.4	4.3	2.0	0.2
29	5.9×5.5	5.0	2.1	0.2
30	5.35×4.9	4.75	2.0	0.2
31	6.5×5.5	3.7	2.2	0.2
32	5.6×5.5	5.05	2.05	0.2
33	6.2×5.6	4.5	2.1	0.2
34	5.7×5.45	4.05	2.25	0.15
35	5.7×5.55	3.4	2.7	0.1
36	6.0×5.5	4.0	2.3	0.1
37	5.95×5.7	4.85	2.2	0.2
38	5.95×5.9	3.9	2.05	0.15
39	5.8×5.5	4.05	2.35	0.15
40	5.5×5.1	3.3	2.2×1.7	0.1
41	6.5×6.3	3.6	2.3	0.2
42	6.5×5.9	4.7	2.45×2.05	0.25
43	6.7×7.7	21.8	3.1	1.55

遺構」とする積極的な根拠が見出せなかったため、遺構の形状を取って「溝状遺構」と訂正することとした。溝状遺構の時期については、土器の出土がないため決めたいが、出土した鉄斧が姫路市宮山古墳出土の鉄斧と重量・形の点で近く、同古墳の時期である古墳時代中期頃と考えられる。

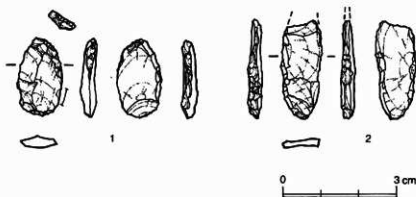
第3節 旧石器時代の遺物 (第59図1・2, 第60図)

発掘調査段階では旧石器時代の遺構はもちろんのこと遺物の存在も判らなかつた。整理作業段階で旧石器時代の遺物を確認したものである。出土地点は離れているが、弥生集落跡からの出土である。龍子向イ山遺跡北地区西斜面の山腹からで、日照時間の長い緩斜面である。揖西平野を見下ろす斜面で、視界も開いている。弥生時代中期の集落に伴う住居跡埋土・包含層から出土している。弥生期の下層にプライマリーな層があるわけではない。確かに地山である岩盤まで掘り下けていることから遺構の存在は考えられない。

ナイフ形石器が2点出土している。包含層及び弥生時代の住居跡埋土より出土しており、ともに原位置を留めていない。この2点の他には、風化の進行度がこれらに近い小型の剥片1点が認められたのみで、確実に旧石器時代に属すると認定し得るものは存在しなかつた。

(1)は、サヌカイト製の縦長剥片を素材とする、小型のナイフ形石器である。完形。正面右側縁の約半分と左側縁のほぼ全体にブランティングを施す。右側縁のものは、全て腹面側から施されるが、腹面にも若干の小剥離痕が残る。左側縁のものは、基部側の1枚を除いて、背面側から施されている。素材剥片の打面をそのまま残す。風化が著しい。長さ2.00cm、幅1.15cm、厚さ0.25cm、重さ0.99g。

(2)は、横長剥片を素材とするナイフ形石器である。サヌカイトを用いており、石質は1に類似する。先端部を折損する。背面に残る一次剥離面の方向は、主剥離面のそれに概ね一致している。ブランティングは、素材剥片の打面部側の全体に、全て腹面側から施される。打面調整は、打点部にわずかに打面が残るものの、どの程度施されていたか不明である。素材剥片の下縁部にあたる正面右側縁のほぼ中央にも、ブランティング様の小剥離痕が認められるが、その意図は不明である。右側縁の他の部分は折面状の剥離面となっている。1同様風化が著しい。現存長2.60cm、幅1.10cm、厚さ0.30cm、現存重1.09g。



第59図 旧石器実測図

小 結

今回の調査では、ナイフ形石器2点が原位置を遊離した状態で出土したのみで、本遺跡の旧石器時代における詳細は全く不明と言わざるを得ない。ただ、今回の調査地の近傍に当該期の遺跡が存在する可能性は極めて高いといえよう。

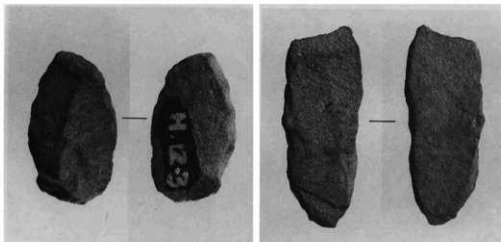
ナイフ形石器は、ともに2cm強の小型品である。素材剥片に、縦長と横長の双方が用いられている点も注意される。こういった小型のサヌカイト製ナイフ形石器は、南播磨地域の明石市・西脇市周辺、明石川流域で表採資料を中心に多くの類例が知られているが、本遺跡は、これらとはやや離れて、揖保川流域に位置しており、右岸地域では2ヶ所目の検出例である。

南播磨地域では、加古川下流域を中心に約120ヶ所の遺跡が知られているが、本遺跡はその密集部から西に離れた、分布が比較的希薄な地域に位置しており、現在のところ、南播磨の遺跡群の最も西に位置するものである。

遺跡の地形的立地からみるならば、西脇、加西、明石周辺の遺跡群は、いずれも樹枝状に入り組んだ丘陵の縁辺部や中・高位段丘上で主に石器が採集されるのに対して、今回の資料は、比較的急傾斜の丘陵地の山腹から裾部にかけて出土しており、2点の石器がそれぞれ単独分布ではなく、周辺に遺跡の存在を考えるならば、地形的な立地の相異をどういった観点から解釈するのとも重要である。

以上述べたような、遺跡の内容にまで及ぶ分析は、採集資料や他の時代の包含層などの調査によって検出された資料がほとんどである本地域においては、非常に困難であることは否めない。

従来の瀬戸内地域でのナイフ形石器の編年観では、本遺跡例のような小型品では、「井島Ⅰ期」に位置付けられ、瀬戸内系ナイフ形石器の終末期の様相を示すものとされてきた。ところ



第60図 旧石器 (約2倍)

が、1984（昭和59）年、兵庫県教育委員会によって調査された多紀郡西紀町板井・寺ヶ谷遺跡において、始良・丹沢火山灰の下層から、小型のサヌカイト製ナイフ形石器が検出されたことにより、小型ナイフ形石器の編年的位置を中心に瀬戸内地方の編年は再考を余儀なくされている。今後、素材割片の形状や加工部位、割片剝離技術など多角的な分析が必要といえよう。

〈参考文献〉

旧石器文化談話会「兵庫県旧石器時代遺跡分布図及び地名表」『旧石器考古学』第21号 1980年

兵庫県教育委員会編『シンポジウム「旧石器時代の人間と自然」—春日・七日市遺跡と板井・寺ヶ谷遺跡における発掘調査の成果から—』1985年

